



Title	造林地のとどまつの凍害に関する研究
Author(s)	今田, 敬一; KONDA, KEIICHI
Citation	北海道大學農學部 演習林研究報告, 16(2), 117-174
Issue Date	1953-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20693
Type	departmental bulletin paper
File Information	16(2)_P117-174.pdf



演習林研究報告 第十六卷 第二號

造林地のとどまつの凍害に関する研究

教授 林學博士 今田 敬一

STUDIES ON FROST INJURY OF AFFORESTED TODOMATSU (*Abies Mayriana*)

By

KEIICHI KONDA, *Professor, Ringakuhakushi*

目 次

緒 言	118
研究の動機と経過	118
研究の場所	119
研究の方法	121
凍害の痕跡	122
A. とどまつ 凍害造林地の實態	128
1. 凍害の概況と調査地區	128
概 況	128
調査地區とその低氣温	129
2. 輪梢の芽の凍害	130
3. 凍害地の生長	133
地區の樹高	133
地區の上長生長	135
4. 凍害をうけた とどまつ の形態	136
5. 林縁の凍害緩和作用	138
6. 林縁の とどまつ の生長状態	141
7. 現在の状況	144
調査地區附近の現状	145
林縁附近の現状	146
凍害をうけた とどまつ の枯損	147
B. 凍害の試験	148
8. 植栽地とその低氣温	148

植栽地・植栽の方法	148
植栽地の最低気温	149
9. 凍害の経過	152
10. 植栽したとどまつの凍害	159
軸梢の芽の凍害	159
枝の先端の芽の凍害	161
上長生長	164
11. 発芽の遅滞	165
12. 凍害試験の結果	167
結 言	171

緒 言

とどまつは北海道の重要な造林樹種であるが、苗圃において凍害をうけやすいばかりでなく、造林地に植栽してからも凍害をうけやすい爲、生育が思わしくなかつたり、またいくら植えても枯れて了う場合がある。

別に とどまつ だけに限つたことではないが、造林地の凍害は、一般によく理解されていると言われない。生育がわるい直接の原因は凍害であるにも拘わらず、挙げれば挙げるのできる立地の悪条件や、凍害の後にあらわれ勝ちな、虫害や菌害などに直接の原因があるかのよう誤解されていることも少くない位である。

著者は北大苫小牧演習林の凍害地について、晩霜季の低気温を観測しその結果を公刊したが、同時に、その凍害地に造林したとどまつの生育と被害状況についても、調査と試験を行つた。これによつて、造林地のとどまつの凍害の實態を一應明らかにすることが出来たと思うので、この稿を草する次第である。これによつて北海道のとどまつ造林に、幾分でも貢献することができれば幸いである。

この研究は服部報公會と日本學術振興會の援助、引續き文部省科學研究費をうけた著者の森林の微氣候に関する研究の一部である。

研究の動機と経過

北大の苫小牧演習林は比較的寒冷なところで、苗圃の凍害がいつも問題になつている。昭和13年の春、造林のためとどまつの成苗を検査したところ、山出し可能の苗は3158本のうち約30%の950本にすぎなかつたことがある。しかしそれも大部分は凍害のため複梢になつており、植えるまえに梢頭の小枝を適當に剪定しなければならぬ有様であつた。このように苗木のほとんど總てが可なりいちじるしい凍害にかかつてるのを知つて驚いたが、同年の6月18日になつて、おなじ苫小牧演習林の山の神事業區の一部にひど

い晩霜があり、新植地のとどまつ約12萬本が大きい被害をうけ、他にやや古い造林地のどいつたうひなどの分もあわせ、合計約24萬本の植栽木に大小の被害があつた¹⁾。

著者はこれらを動機として造林地の凍害問題の研究を思ひ立ち、13年の夏、北海道内の各北大演習林と當時の樺太演習林をめぐり、造林地の凍害について概念をえ、翌14年の4月、札幌にちかい苫小牧演習林のなかに典型的な凍害地を見出し、植栽した苗木に現に凍害をあたえている地表附近の低気温の観測、それと同じ場所のとどまつの凍害の實態調査及び凍害に關する試験を実施した。

この研究に最も力をつくしたのは昭和14年の春から17年の春にいたる滿3年間で、重要な季節には現地に滞在し、またその前後の數週はほとんど毎週一兩日づつ現地に行つて観測と觀察にあたり、できるだけ事態を正しくつかむように努力した。

その後はにわかには戦局がきびしくなり、やがて苫小牧演習林は北海道防衛の一基地となつて、昭和19年には試験地の一部が軍用に伐採され、研究もひとまず打切らなければならぬ有様となつた。

終戦後もしばらくそのままであつたが、昭和26年の春、研究のはじめに凍害地に試験のため植えたとどまつ苗の育成と被害を調査したので、前後の結果とをあわせてこの稿をまとめることにした。

研究の場所

研究を実施した場所は、北大苫小牧演習林幌内事業區第21林班である。ここは著者が昭和23年に公刊した「晩霜季における林地の低気温」²⁾の研究を実施した場所で、頂が海拔47.2mの火山灰の丘の北斜面にあたり、問題になつた裾の部分は、ここを横切つてゐる林道づたいに、春の雪どけ水が火山灰を運んで堆積させるため淺く廣い凹地となり、そこに夜の寒冷な重い空氣が停滞して非常にはつきりした地形的凍害地となつた³⁾。(圖1)

ここはとどまつとどいつたうひを昭和2年5月に植えた所である。當時は雜木林を皆伐して前生樹をほとんど残さなかつた。ところが丘の斜面の高みに植えたどいつたうひはほとんど無害であつたのに⁴⁾、その下の丘の裾約4haに植えたとどまつの一部に凍害

1) 北海道東部の寒冷寡雪な弟子屈營林署部内の山火跡地等2500haの造林の結果、針葉樹の成績不頁の主因は晩霜害で、ことにとどまつの改植は87%が晩霜害に基因した。佐々木準長、弟子屈に於ける臨時造林事業に就いて。昭和27年、52頁。

2) 北海道大學農學部演習林研究報告。14卷、1號、昭和23年。

3) このような地形に低気温があらわれ凍害地になるということは、たとえばつぎの書にもみられ、なお多くの研究報告がある。M. WOELFLE, Waldbau und Forstmeterologie. Neudamm und Berlin 1936, S. 16.

4) どいつたうひも本來は凍害によくい樹種で、歐州ではTanne, Bucheなどと共に、最も弱いとされている。

があらわれ、昭和7年の春までに3割の補植をしたあげく、部分的に成林の見込みを失ったが、そのまま放置していたものである。

このとどまつ造林地の東側に、大正6年植栽のてうせんからまつ林があり、これは

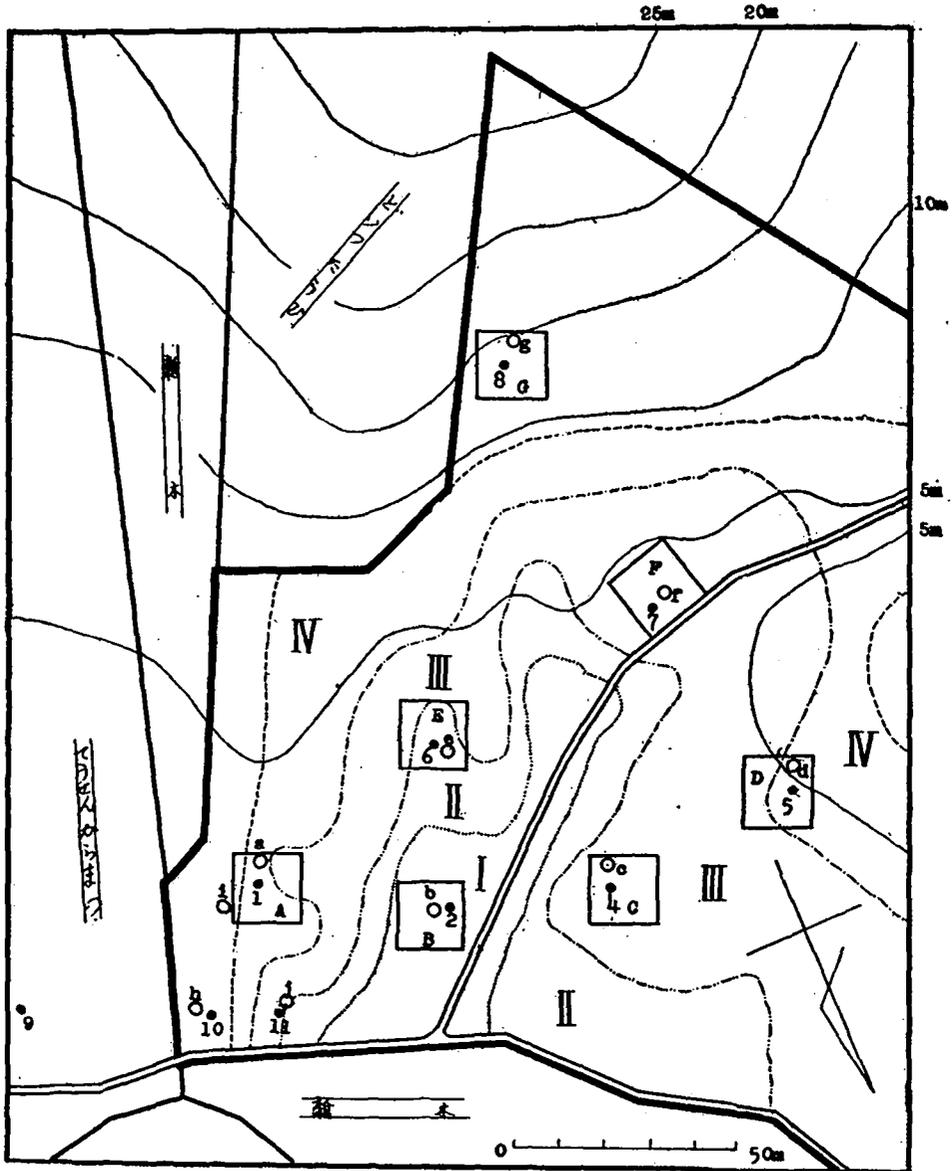


圖1 凍害地の地形・被害状況見取圖

- | | | | |
|-----|---------|---|-------|
| I | とどまつ激害地 | □ | 調査地区 |
| II | 〃 甚害地 | ○ | 試験植栽地 |
| III | 〃 中害地 | ● | 気温観測點 |
| IV | 〃 微害地 | | |

既に成林していた。またこのからまつ林ととどまつ造林地の間に、なら等を植えて雑木林に變つたくさび形の帯状地があつた。この二つの森林——ことにからまつ林はとどまつの生育に大きい影響をおよぼしていた。

とどまつ造林地の西側は、ストローブ松の古い造林地とからまつ林で、どちらも成林していたが、とどまつの生育にはほとんど関係がなく、また造林地の北側に、やちだもを植えた叢林状の茂みがあつて、これはもつと北に流れようとする寒冷な重い空気の流れをさえぎり、霜孔の形成を助長しているようであつた。

昭和14年ころの状態は、造林ののち12年以上経過していたが、灌木状の萌芽樹が局部的に散生していたほか、低所は、草丈1mほどのほざきしもつけを主とする雑草をもつて全面的に覆われている有様であつた。従つて夜の放熱がさかんで、低所に停滞する寒冷な空気の有害作用は、造林當初の昭和2年から、萌芽がまだ繁茂するにいたらなかつた昭和18年頃まで、場所によつては引続き激しく働いていたのである。

前記東側のからまつ林は、軍用のため昭和19年に伐採され、跡地はしばらく耕作に用いられていた。

研究の方法

この火山灰の丘の斜面のとどまつ造林地は、地形と隣接林(前記のてうせんからまつ林と雑木林)の影響を大きくうけ、凍害の状況が、場所によつて相當ちがつていることが注意をひいたので、とりあえず約200m×250mを區劃して水準測量と地形測量を実施し、また隣接林の位置などをたしかめた。

凍害の直接の原因は、この造林地にあらわれる低氣温であると思われたから、適當な地點合計16箇所に觀測點をもうけ、最低寒暖計によつて晩霜季を主とする毎日の低氣温を觀測した。凍害は造林地に植栽したはじめの數年間に特にいちじるしいことが察せられたので、地表附近——主として地上0.25mの最低氣温をはかつた。前記のとおり、このことに關しては既に一部を公表している。

またこの造林地がいちじるしい凍害地であることは、様々な微候からみて間違いないと信じていたが、たしかに凍害地であるということを確認、また凍害そのものの経過をくわしく知るためには、低氣温と被害の状況をいろいろな角度から照しあわせてみる必要があり、これについては出来るだけ念をいれて觀察した。

また凍害の實態については、地形測量ののち、測點から測點をたどりながら目測による被害度の區劃線を求めたほか(圖1)、低氣温の觀測點のうち、主要な7箇所を圍む調査地區をもうけ、それぞれの區域のなかのとどまつの生育と凍害の状態を毎木に調査し、また凍害を緩和する効果がいちじるしかつた東側の林縁附近でも、おなじような毎木調査

を行つた。

また低気温の観測點の附近 10 箇所に、凍害をうけていない健全なとどまつ 苗を植え、低気温をはかりながら凍害の状態を観察した。

これらの観測・調査・観察などは、長期間繰返して研究内容の充實をはかるつもりであつたが、數年にして戦争のため打切らねばならなくなり、戦後ふたたび繰返そうとしたときには、往年の重要な標杭などがうしなわれ、始めの計畫とおり實施できなかつたことは残念であつた。しかし一應結果は出ているので、この稿をまとめることにしたのである。

凍害の痕跡

凍害をうけたとどまつは、その痕跡をのこしている¹⁾。ある痕跡はまもなく不明瞭になるけれども、數年または十數年、あるいはそれ以上ものこる痕跡がある。従つてこのことを知つていれば、凍害の判定に役立つはずである。またこのことは、本稿の全体と密接な関係があるので、一應先に取扱ふこととする。痕跡の主なものはおりのとおりである。

1. 膨らみかけて凍死した芽があること

冬を越す冬芽の状態で、芽だけ凍死していることはほとんどないが、膨らみはじめる時、開葉に先だつてしばしば凍死する。それは固く重なりあつていた芽鱗がわずかに緩んだ状態で起り、凍死したのちは間もなく萎縮し、死んだことが見ただけでわかるようになる。側芽の場合は、そのすべてが同時に凍死するとはかぎらず、また、生き残つたものはそれだけが發芽する。凍死した芽はくさりやすく形も小さいから、秋までにはその痕跡も消えてしまうことがしばしばで、また、あとから發生した不定芽のために、一層わからなくなることもしばしばである。凍害地のとどまつには、このように膨らみかけて凍死する芽が、非常にたくさんあるものである。これだけでも凍害をうけていることがわかるのだが、凍害と氣がつかなければ、凍死してくさつた芽は、蟲害をうけたように見えるのでよく間違われる。新緑のころ注意して観察すれば、この凍死の状態を正しくつかむことができる筈である。

2. 綻びかけて凍死した芽があること

前の場合は、膨らんでもまだ開かない芽が凍死した場合だが、この場合は、綻びた芽の状態凍死している場合である。前の場合はほとんど目立たないが、この場合はかなり目立つてくる。晩霜季の有害な低気温は連日あらわれるものではなく、その比較的ゆるやかな合間に開葉はさまざまな程度に進行する。そこに有害な低温があらわれると、綻びか

1) W. SCHÄDELIN は Tanne, Fichte その他の凍害の痕跡、凍傷木の生育経過などをよく観察している。Beiträge zum Kapitel Spätfrost. Schweiz. Zeitschr. Forstw. 1920, S. 329-344. 本稿の凍害はいわゆる晩霜害、すなわち晩霜季の低気温にもとづく被害を主として意味する。

けた芽は、芽鱗の間に新葉をわずかにのぞかせているものから、1~2cmも伸び芽鱗を脱落するにいたつたものまで、さまざまな状態で凍死し、凍害地のとどまつには、それらが無数に附着しているのがみられる。圖4(a)は全長30cmの梢頭部であるが、前記の膨らんだまま凍死した芽と、この綻びて凍死した芽があわせて65も附着していた。圖3はまた、全長56cmの梢頭部で、これは54の凍死した芽を持つていた。

綻びたとどまつの若葉は低温に感じやすく、凍害をうけると紅になり、まもなく濃い褐色に變り、ほとんど枯れたままの姿で1年くらい、時には2~3年またはそれ以上も、梢端などに附着したまま残っている。従つて注意すればいつでも直ちに見出すことができる。枯れた若葉がくさつて脱落し、芽の基部に小さい陥没をつくつていこともある。

3. 針葉が紅變し脱葉すること

以上は晩霜季の凍害だが、秋にはいつて早霜の害をうけた育ちおくれの若葉、また晩秋から冬にかけてあらわれる激しい低温の害をうけた針葉も紅に變色する。それは被害の程度によつて、葉の先端など一部分の變色に止つていることもあるし、葉の全体に及んでいることもある。おなじ個体でも、枝條によつて必ずしもおなじではない。この紅變した針葉は、春の若葉のように濃い褐色にかわることなく、次第に色があせ、被害の程度がいちじるしければ遂に脱葉する。したがつて脱葉しているものが多いところは、この凍害の激しいところである。冬芽は保護されているから、針葉は紅變しても、翌春凍害をうけなければ發芽するが、脱葉が多ければ、樹体が衰弱するから健全な生育は望まれない。しかもこのような秋の低温の被害がいちじるしい所は、晩霜季の春の被害もいちじるしいのが常であつて、春秋二季の凍害のため、被害は促進されていると見ることが出来る。

4. 複梢が形成されること

凍害をうけたとどまつは複梢になりすい。したがつて複梢木の多いところは、現に凍害をうけつつあるか、または以前に凍害をうけたことを示している。激しい凍害地では、複梢になる前に凍死するものがたくさん現われる。しかし梢頭部の凍害を繰返しながらか、しかも生存を続けることができれば複梢が形成される。

複梢の最も極端な場合は、樹冠が箒のようにむらがる場合である。軸梢の頂芽が凍死すると、有勢な側芽のどれかが起き上るか、または軸梢の不定芽が伸長して新しい軸梢となる傾向はあるが、激しい凍害が年々繰返されるところでは、この傾向は妨げられ枝が次第にむらがつてくる。圖2は、昭和15年5月に植えた健全な5年生の山出苗が、11年のうち箒状の複梢に變つた昭和26年春の姿で、植付けたのち間もなく複梢となり、年とともに複雑になつている。これは一緒に植えた(後述植栽地j)20本のうちただ1本の生存木で、脱葉も甚だしいから、そのままで余命はいくらもない。一般に、箒状の複梢木は、上長生長がいちじるしく損われている。たとえばこの圖の複梢木は16年生だが、高さは

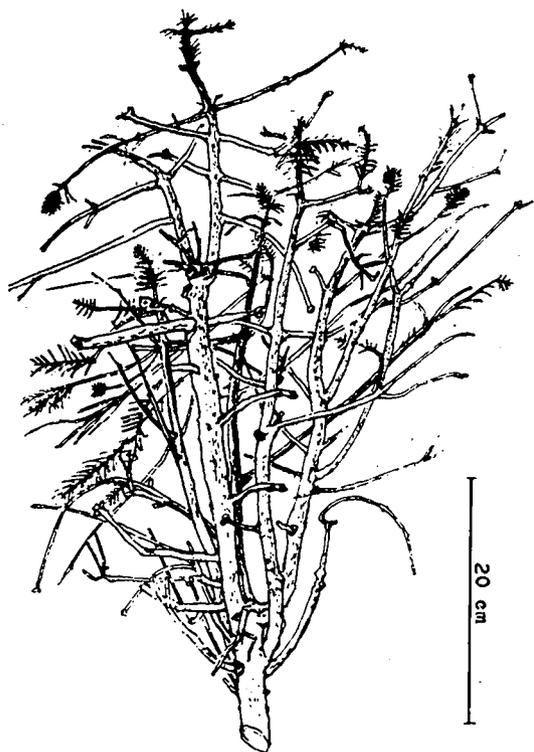


圖2 叢状の複梢

凍害をうけていない5年生のとどまつ苗を激しい凍害地に植え11年経過したもの、辛うじて生きているが將來の望みは勿論ない。

42cm にすぎない。このようなものが多く発生するところは激しい凍害地で、特に凍害豫防の手段を講じないかぎり、植えても成林の見込みは先ずないと考えてよい。

二叉・三叉またはそれ以上の複梢も、凍害地では凍害の痕跡であり、すでに成林していても、このような複梢が多くあれば、かつて凍害地であつた疑いがある。これらの複梢は、互にほとんど同じ生育をつづけることがあり、またそのうちに、どれか一つ、特に優勢になることもある。前者は激害地の傾向で、後者は微害地の傾向である。たとえいくらか育ちがおくれても、この傾向のあらわれることがのぞましい。しかし1~2m またはそれ以上も生長してから形成される複梢は、不良木としての將來を擔う場合が多く、あまり凍害が激しくないところに、かえ

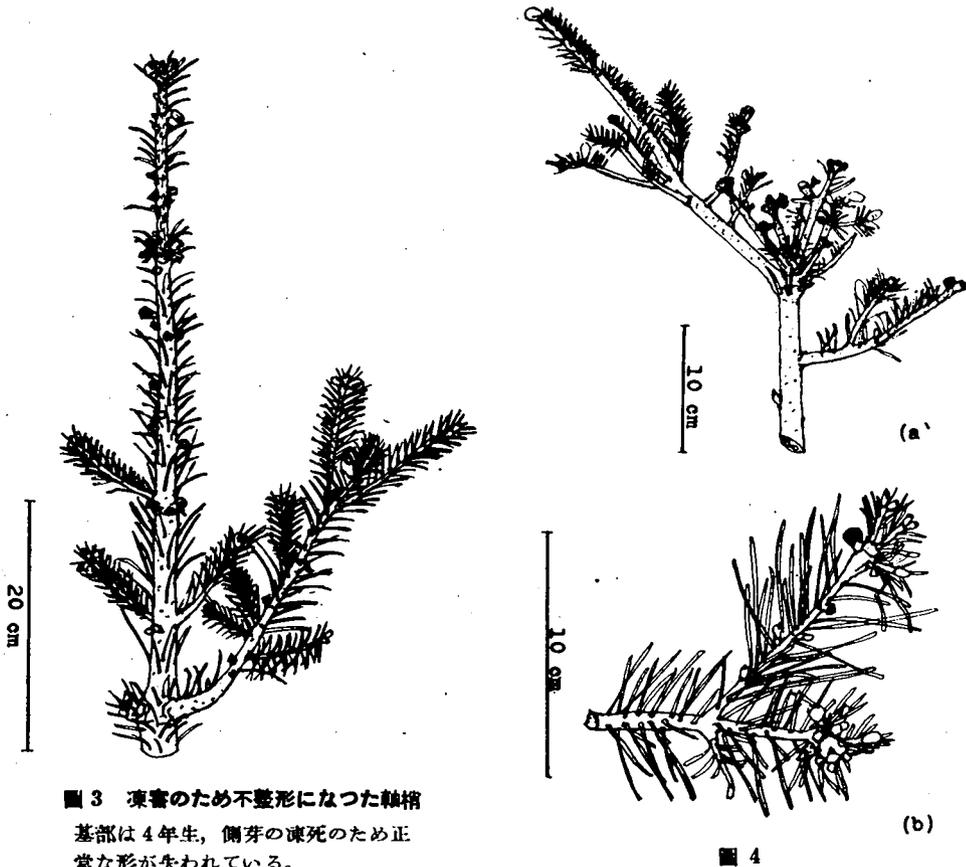
つてしばしば現われている。たとえば問題の凍害地では、丘の中腹附近に相當散在している。植付けてのち間もなく形成された複梢は、そののちの生育状況がよければ無用のものは萎縮し、痕跡さえ消えてしまうことがしばしばある。

5. 軸梢の枝付きが不整になること

軸梢の頂芽が凍死すれば複梢になりやすいが、頂芽は損われず、側芽の一部が損われれば、ととのつた形に輪生するはずの枝付きが不整になる。最悪の場合は、側芽のすべてが凍死するから、ただ頂芽だけ伸長し、枝のない新梢が形成される。ただし後になつて、側芽の位置またはその近くに、不定芽を發生することもあるが、枝のない新梢は異様に目立つものである。

梢頭の側芽の凍死は、條件次第で非常に多い現象であるから、軸梢の枝付きの不整は非常に多く見られる凍害の痕跡である。

圖3は基部が4年生の軸梢で、最近の2年間は、すべての側芽がつづけさまに凍死し、頂芽だけが無事に伸長して梢頭部をつくっている例である(小枝は1年生、不定芽が伸長)、



■ 3 凍害のため不整形になつた軸梢

基部は4年生、側芽の凍死のため正常な形が失われている。

■ 4

- (a) 頂芽が凍死した軸梢(4年生)
 (b) 凍害のため分岐不整の小枝

3年前の春は、ただ一つの側芽が生存、他のいくつかの側芽はみな凍死し、枝付きはこのように不整になつた。

前記のとおり、この軸梢と側枝に、凍死してくさつた芽が54も附着していた。全長は56cm、中寄地から採取したものである。

■ 4(a)もおなじところから採つたもので、基部はおなじく4年生である。これは3年前に、側芽の大部分と頂芽が凍死し、梢頭に多くの不定芽が発生し、これから形成された小枝が不規則に密生している。左斜め上にのびている1本の枝は、3年前に生きのこつただただ一つの側芽が発達したものだ。現状から判断すると、梢頭にむらがつている小枝から、特に優勢なものは當分あらわれそうでなく、左の大きい枝も、當分は斜め上に伸長するだけであろう。この不整な軸梢に、凍死してくさつた芽が合計65附着しているが、春とともに若干のあたらしい芽が萌えている。■ 5も頂芽と側芽が凍死して不整になつた軸梢である。



図5 凍害のため著しく不整形になつた軸梢

軸頭の頂芽と側芽の凍死を繰返しこのような不整形な形になつた。右下の切断した枝は64cmこれより上の高さにくらべ異様な形である。

年生なので、2年前の春、先端の三つの芽のうち側方の一つが凍死した。そのため亜枝は片落ちとなり、二つのうち一つだけ伸長した。翌年の春は凍害がいちじるしく、この亜枝の先端の三つの芽も、また元の枝の先端の三つの芽もすべて凍死し、そのかわり不規則に不定芽を発生した。このとき、2年前に凍死した亜枝となるべき芽の跡にも不定芽を発生している。この枝には、凍死してくさつた芽が現在10箇附着していた。不定芽の先端その他に、あたらしい芽がみられる。これは採取したのち室内で膨んだものである。

7. 上長生長が損われていること

これは凍害に限つたことでないが、凍害の場合、極端にまであらわれることがある。軸頭の頂芽が凍死すれば、そこに不定芽が形成され伸長したとしても、また軸頭の枝のどれかが側方から立上つたとしても、上長生長はさまたげられるのが常である。また時には上長生長が全くないことがあるばかりでなく、激しい凍害地にしばしば見られることは、頂芽、側芽もろとも、軸梢そのもの上部が数cmまたは数十cmも凍死することで、結果として樹高は以前より減少する。帚状の複梢を形成するほど、連年凍害が繰返されている

6. 小枝の分岐が不整であること

とどまつのほとんどすべての枝は、軸に一つと、これに並んで左右に一つづつ、合計三つの芽を先端にもつているが、凍害地ではこれらの芽も、所詮凍害をまぬがれることができない。この結果は正常な分岐をさまたげ、枝の軸の方向への伸長がなかつたり、分岐が片落ちになつたり、または全く分岐がなかつたりする。この状態が年々繰返されれば、枝全体の構造が不整になり、正常に育つたものにくらべ、いちじるしく萎縮してみえる。もしも枝の構造が不整で、しかも凍死した芽がたくさん附着していれば、もはや凍害とみて間違いない。

図4(b)は中害地の凍害木から、一つの枝の先端を切断したもので、不整な分岐の實例である。基部は3

ところでは、ほとんど上長生長のいとまがない。圖2の複梢木はそのよい例である。同圖の軸梢は地上1.4 cmで切斷しているから、樹高2 m未滿で植栽後24年経過している。一般に、樹高は凍害の程度の一つの指標と考えてよいほど関係は密接である。

8. 新梢が凍死すること

新梢と開きははじめた芽の區別はあきらかでないが、凍害地に多いとどまつの新梢の凍死は、精々1~2 cmの程度伸長したものである。凍害をうけた新梢はまず紅變し、間もなく暗褐色となり先端が下垂する。そしてそのまま乾燥し、1年くらい、またはそれ以上梢端などに附着しており、形も大きいから、凍死した芽より目立っている。しかし、この状態で凍死するものより、前に述べたように、芽鱗の間から、新葉がわずかに現われただけで凍死するものはるかに多く、またこれよりも、發芽に先立ち、芽が膨んだだけで凍死するものの方が多い。そのわけは、季節がすすみ開葉がすすんだとき新梢の凍死がおこるので、すでに有害な低温があらわれる頻度、すなわち凍害の機会がすくなくなっているからである。

晩春または初夏のいわゆる霜害は、いちじるしく人の注意をひくことがある。それは意外な季節はすれの被害が注意をひくばかりでなく、誰がみても一目でわかる被害の状態が注意をひくのである。このようなことは、とどまつの造林地にも時として見ることである。しかし甚だしい季節おくれの凍害は度々繰返されているのではなく、むしろ珍しい出来事であつて、それよりも、あまり目立たないが、毎年繰返されていて被害甚大な芽の凍害に注意しなければならない。

9. 育ちおくれの新梢が多いこと

凍害地では凍死する定芽が多く、これに替わる不定芽がたくさんできて二次的に發芽するため、時には發芽が夏までつづくことがある。軸梢や枝そのものまで凍死した場合は別とし、凍害をうけた芽が多いほど不定芽の發生が多く、また凍害が激しいほど、發芽の期間はながびく。すでに夏になり、晩霜季を無事に経過し伸長した新梢の色も濃くなつたとき、この黄をおびた育ちおくれの新梢がたくさんあるのは、可なり目立つて奇異の感じをいだかせるが、頂芽が凍死した梢頭にはそれがむらがり生え、また、たいてい著しく繊弱であることなどから、直ちにそれとわかり、これによつても凍害を知ることができる。

植栽ののち何年もたつている激しい凍害地では、以上の痕跡のすべてが存在すると考えてよい。春早く植えたあたらしい植栽地では、もしそこが凍害地であれば、間もなく芽の凍死が無數におこるのであろう。激害地ではその夏までに、または翌年の夏までに多くの枯損があらわれ、生きのこつたものも複梢となる傾向をしめし、結局2~3年でほとんど全滅する。軽微な凍害地では、一般にすべての種類の被害がかかるく、また個体によつて、可なり被害の程度がちがつている特徴がある。従つて極端な場合には、多くの樹々にほと

んど凍害の痕跡なく、いずれもよく育っているなかに、たまたま致命的な痕跡をとどめたものが混っている。

A. とどまつ凍害造林地の實態

1. 凍害の概況と調査地區

概況 この造林地をみて直ちに気がつくことは、低い所に植えたとどまつは凍害のため著しく損われて生育がわるく、丘の斜面はだいたい上ほど生育がよいことで、1~2mも地盤が高くなれば、生育は眼にみえてちがっている。そして、地盤が最も低くて生育も最もわるい地點から、直高で10mほど坂を登ると、それから上の斜面には、ほとんど正常な生育がみられたのである。

また他の一つの著しいことは、東側にある隣接林、ことにてうせんからまつの林縁にあたるとどまつが帯状によい生育をとげていることで、それは特に目立っていた。だいたい隣接林に近い部分ほどよく育っているが、林縁をある距離だけはなれると、地盤の低い所では、急に生育がわるくなっていた。

■1に、昭和14年の、これらとどまつの生育状態の見取岡が記入してある。これはまた凍害状態の見取岡である。この岡の區割線は主としてとどまつの樹高によつた。丘の裾の最も低い所をしめている激害地(I)は、新植または補植の後7~12年たつていたにもかかわらず、樹高は僅か0.5m内外、箒を立てたような複梢木が點々と散在しているだけで、植えたとどまつの大部分は既に消えていたが、立枯れたままのものも相當あり、將來成林する見込みはなく、最もみじめな有様を呈していた。

甚害地(II)は激害地のまわりの1mほど高い土地をしめ、激害地よりいくらか伸びているが樹高は大差なく、複梢木も、凍死して消えたものも、立枯れもたくさんあつて將來の見込みはないが、激害地ほど被害がきわだつていない所である。

中害地(III)は甚害地のまわりの、更に1~2mほど高い土地で、とどまつの樹高は1mくらい、凍死したものも可なりあるが、残っているものは先ず育つように思われた。尤も生長は遅れている。

微害地(IV)は樹高1.5mくらい、凍死したものも點々とあるが凍害は比較的すくなく、正常にちかい生育をとげている地區、最も低い地點からおよそ5~6m以上高い斜面をしめている。

この微害地の更に上部、最低地點からおよそ9~10m以上高い斜面には致命的な凍害がなく、必ずしもすぐれた生育状態でないとしても、樹高は大體2m以上、ほとんど無害といつてよい地區がある。

また岡にみるように、からまつ林と雑木林の縁ぞいにも、ほとんど無害にちかい生育

をとげている地帯がある。この幅はあまり廣くはない。しかも土地の低いところには凍死したものも混つている。しかしその同じところに、全域を通じて最も樹高生長のよいとどまつも混つていた。

この造林地にはまた、とどまつと同時に植えたどいつたうひがあるが、圃のように大体8m以上の斜面に植えられており、しかもその比較的低い部分は、側方から雑木林の保護をうけており、凍害はほとんど認められなかつた。

この見取圖は、測量と同時にできるだけ慎重に踏査してえがいたものである。このように、とどまつの生育状態の區劃線——従つてまたその凍害の程度をしめす區劃線は、林縁附近を別とすれば、だいたい等高線と一致する傾向をしめしている。

昭和14年から引續き觀察した結果、次のような事實もみとめられた。

凍害は造林地に新植したはじめの數年間が特にいちじるしく、この時代に凍死した苗木は間もなく腐朽して消えてしまう。このことは、別に試験によつて確めた事實ともよく一致する。

しかしまた10年以上も一應生存しつづけ、結局凍死してしまうものもある。これは主として、凍害が可なりいちじるしい地區にみられる現象であつた。したがつてこのような所では、昭和14年以後にも枯死するものが相當あり、次第に残りすくなくなつて、26年の再調査のときまでに、皆無の状態になつてしまつた地區もある。

しかしまた、凍害のあまり著しくない地區では、若い時代に凍害をうけ、その傷痕をのこし、生長もおくれ勝ちながら、次第に正常な生育をとりもどして行くものも少なくなつた。

調査地區とその低氣温 この凍害地のとどまつの生育と被害の状況をみるため、昭和14年の早春、圖1に記入してあるとおり、AからGまで7箇所の地區を區劃して毎木調査を行つた。生育と被害は場所ごとにちがつており、大きい區劃は適當しないので15m×15mとし、6尺方形になつている植列と一致させたから、各地區にそれぞれ $8 \times 8 = 64$ 本のとどまつが植えられていたはずである。

これらの地區内にはそれぞれ氣温の觀測點があり、地區内にない場合は極めてちかいところに觀測點があつた。したがつて各地區の低氣温は大體わかつていた。

次の表は各地區に該當する觀測點の番號と、地上0.25mではかつた昭和14年の晩霜季——5月の最低氣温である。霜日は最低氣温が 0° または 0° 以下に降つた日で、この月は11日あつた。(表1)

最も有害であり、また最も或る場所の低氣温の特徴をあらわす最低氣温の極によつて、各地區の寒暖の順をもとめてみると、G, A, D, C, F, E, Bの順に、終りほど寒冷であるといふことができる。またこれによつて、便宜上の寒暖の區別をすれば、G, A, Dはいす

表 1 晩霜季の最低気温¹⁾ °C, 地上0.25 m

観測点番號	地 區	月 平 均	霜日平均	極	寒暖の傾向
1	A	2.15	-2.92	-5.2	暖
2	B	1.65	-4.23	-8.2	最寒
4*	C	1.35	-4.36	-7.2	中
5	D	2.25	-2.98	-5.9	暖
6	E	1.70	-4.13	-8.0	寒
7	F	1.63	-3.81	-7.5	寒
8	G	2.96	-1.25	-3.5	最暖

* 寒暖計を設置した箱の構造と大きさが他とちがつている。

れも割合に暖く、F, E, B は寒冷、C はそれらの中間にあるとみて都合がよい。G 地区は最も暖かく、反対に B 地区は最も寒い。このことを寒暖の傾向として表に附記した。

寒冷なところは凍害がいちじるしくて生育もわるく、比較的暖いところは凍害がすくなく生育もよいはずである。生育を調査した結果も正にそのとおりであつた。

2. 軸梢の芽の凍害

春発芽する前のとどまつは、軸梢²⁾の先端に一つの頂芽と、これをかこむ數個の側芽をもつている。順調に発芽すれば、頂芽は伸長して軸梢のあたらしい部分となり、側芽は軸梢をとりまいて輪生するあたらしい枝になるのだが、凍害をうければ、このような完全な形になることができない。

この凍害地には、軸梢部の凍害がいたるところに存在する。かつての凍害は何らかのかたちで痕跡をのこし、現在の凍害は、頂芽または側芽の不発芽、また発芽したものが現に凍死していることによつて直接みることができるのである。なかにはまた、軸梢の頂芽または側芽ばかりでなく、軸梢そのものの先端が凍死しているものもある。これは被害の甚だしい地区に多い現象であつた。

研究を開始した翌年の6月8日、各地区について、軸梢の頂芽と側芽の凍害を毎木にしらべて次の結果をえた。発芽は地区によつて多少ちがうが大休5月15日頃からはじまり、6月上旬までに、発芽すべきものはたいてい発芽を終つていた。発芽しなかつたのはほとんどみな凍死したためである。まず地区別に、軸梢の頂芽も側芽も全部凍死した本數と、反対に頂芽もそのまわりのすべての側芽も完全に発芽した本數をあげ、各地区の總本數から計算した百分率をそえる。各地区の總本數からこれらを差引いたものは、軸梢の頂

1) 晩霜季における林地の低気温。8頁、観測點の番號もこれに記載してあるのとおなじである。

2) 針葉樹の軸となつている頂條(Gipfeltrieb)のことであるが、意味をはつきりさせるためこの文字をつかつた。また軸梢の先端部を、本篇では軸頭といつている。

芽または側芽のどれかに凍害をうけ、発芽はしたが、すべてが完全な発芽をするにはいたらなかつたものである。よつてこの本数と百分率も記入して表2をつくつた。

表2 軸梢の凍害状態

地 区	A	B	C	D	E	F	G
頂芽も側芽も全部凍死した本数	11	10	19	16	24	19	11
頂芽または側芽の一部が凍死した本数	28	0	28	25	19	9	8
頂芽も側芽も全部発芽した本数	16	0	7	22	2	3	38
計	55	10	54	63	45	31	57
同上百分率 (%)							
頂芽も側芽も全部凍死した本数	20.0	100	35.2	25.4	53.3	61.3	19.3
頂芽または側芽の一部が凍死した本数	50.9	0	51.8	39.7	42.2	29.0	14.0
頂芽も側芽も全部発芽した本数	29.1	0	13.0	34.9	4.5	9.7	66.7
計	100	100	100	100	100	100	100

表のとおり、軸頭に重大な凍害をうけているものはどの地区にもみとめられ、比較的温暖地区もこれを免れていないことがわかる。ことにB, E, Fの寒冷地区では、総本数の50%以上をしめている。また凍害地だけあつて、軸頭の芽のすべてが発芽したのも、最も温暖なG地区の67%をのぞけば意外にすくなく、B地区はもとよりE, Fの寒冷地区も、完全に発芽したものはほとんど無いといつてよいくらいである。軸頭の芽の完全凍死は榎梢木をつくりやすく、とどまつの生育の大きい障害となり、これが上長生長不良の主な原因となつている。

一般に地面にちかいほど低温があらわれるから、軸頭の頂芽も側芽もみな凍死してしまふようなことは、樹高がひくい場合にたしかに多いのだが、地上から相當の高さにまで及んでいることがしばしばあつた。各地区のうち、比較的温暖¹⁾で凍害がすくないA, D, G地区には、地上2m以上の高さで頂芽も側芽もみな凍死したとどまつが合計15本あり、その樹高——すなわち凍死した軸頭の芽の地上高は表3のとおりであつた。

このように、少ない例ではあるが、3m以上4mにおよぶ高さにさえ凍害はみられるのであつて、これら三つの地区の2m以上のとどまつは合計39本、したがつて15本の凍害はその1/3以上にあつた。

表3 梢頭の凍害の地上高 (m)

A地区	D地区	G地区	C地区
3.22	4.12	3.33	2.71
2.64	2.81	3.15	2.48
	2.64	2.82	2.38
	2.62	2.71	2.23
	2.33	2.62	2.15
	2.25	2.23	2.05
	2.12		2.00

1) この稿で温暖というのは、すべて最低気温が高いということで、日中の気温や、1日の平均気温がたかいという意味ではない。晩霜季の日中の気温がたかいことは、発芽を促進して不利な場合もある。

ている。このことは、比較的温暖な地帯で2m以上に生長しても、この凍害地では必ずしも安全でないことを示している。

しかし中庸度に寒冷なC地帯について、枝の芽の凍害を全般的に観察すれば、だいたい2mを境とし、2m以下には芽の凍害が無数にあるにもかかわらず、それより上は著しくすくなくなっている。それゆえC地帯では、だいたい地上2mくらいをいわゆる霜高と考えてよい¹⁾。

非常に寒冷なB地帯やF地帯で、2m以上に育つたものは皆無の状態だが、この霜高は2mよりもつと高いにちがいない。反対に、比較的温暖なA、D、Gの各地帯では、2m以上にも凍害はあるけれども、霜高は2mよりもつと低いと考えられる。枝の芽の全般的な観察は、やはりこのことを裏付けてくれるのである。

この霜高を厳密にもとめることは困難であるとしても、凍害はたしかに地上からの高さによつてちがつているから、前記の資料を更に樹高階別に検討したのが次の表である。この表は、軸頭の芽が全部凍死したものと、一部分凍死したものをあわせて取扱つている。

表4 樹高階別軸頭の芽の凍害本数

地 帯	A	B	C	D	E	F	G
2m 以上	4 (11)	・	6 (7)	11 (20)	1 (1)	・	7 (21)
1~2 m	16 (23)	1 (1)	19 (24)	14 (22)	9 (11)	9 (9)	6 (22)
1m 以下	19 (21)	9 (9)	22 (23)	16 (21)	33 (33)	19 (22)	6 (14)
計	39 (55)	10 (10)	47 (51)	41 (67)	43 (45)	28 (31)	19 (57)
同上の百分率 (%)							
2m 以上	36.4	・	85.7	55.0	100	・	33.3
1~2 m	69.6	100	79.2	63.6	81.8	100	27.9
1m 以下	90.5	100	95.7	76.2	100	86.4	42.9
計	71.0	100	87.0	65.1	95.6	90.3	33.3

() 内は總本数 1~2mは1~2m未満を意味する

このように、寒冷なB地帯とF地帯では、1m以下でも、また1m以上でも、軸頭の芽の凍害は非常に多く100%または90%にちかく、2m以上に育つことができないほど、被害の程度もいちじるしい。その他の地帯では、どれにも樹高をますほど凍害がすくなくなる傾向がみられ、温暖なA地帯とD地帯では、2m以上となれば凍害はもはや可なりすくなくなる。最も温暖なG地帯では1m以下でもすくないのである。

1) この凍害地の地上高と低気温の關係は先に公刊した。地上2mの最低気温は、地上0.25mより4.3°C高温なことがあつた。林地の地表附近に現れる低気温の観測例。北海道大學農學部演習林研究報告。14卷2號，昭和24年。

凍害本数を合計した百分率は、各地區の凍害の激しさを知るに都合がよい。これによつても B 地區は最も激しく、反對に G 地區は最も緩和されている。

前の表は、軸頭の芽に凍害のある林木を樹高別にかぞえたのだが、軸頭のすべての芽が満足に發芽し、全く凍害をまぬがれているものを樹高別にすると次の關係がある。

表 5 凍害がない軸梢

地 區	A		D		G		C	
	本數	%	本數	%	本數	%	本數	%
3 m 以上	3 (5)	60.0	2 (3)	66.7	1 (4)	25.0	.	.
2 ~ 3 m	4 (6)	66.7	7 (17)	41.2	13 (17)	76.5	1 (7)	14.3
1 ~ 2 m	7 (23)	30.0	8 (22)	36.4	16 (22)	72.2	6 (24)	25.0
1 m 以下	2 (21)	9.5	5 (21)	23.8	8 (14)	57.1	1 (23)	4.4

() 内は總本數

結果は前の表とおなじことを反對の面から示しており、樹高をますほど安全に發芽している。2 m 以上の傾向を知るため、2~3 m と 3 m 以上にわけてみた。本數の半分以上が凍害から安全になる樹高は、A 地區では 2 m 以上、D 地區では 3 m 以上、G 地區では 1 m 以下である。

3. 凍害地の生長

地區の樹高 とどまつの凍害は軸梢の被害がもつとも有害で、それは高さの生長に大きく影響する。したがつて凍害の甚だしいところでは樹高がひくく、甚だしくないところでは比較的たかい。それゆゑ樹高は凍害地内の生育の良不良、また被害の程度をはかるよい尺度になつている。よつて各地區の樹高をくらべてみる。

樹高は測量用のロッドを用い毎木に調査した。凍害地のため二又または二又以上の複梢木がたくさんあつたが、このような場合は主軸と認められるか、または將來の主軸と豫想される梢端までの高さをはかつた。しかし軸梢の頭部がまつたく凍死し、また替るべき枝もわからないため、凍死した軸梢の先端までの高さを測つたものもある。

つぎの表は、各地區に現に生育している とどまつの本數、その平均樹高、最大および最小樹高、現在本數から推測した枯損本數をしめしている。枯損木のなかには現に立枯れているものもあり、消失してしまつたものもある。消失の原因は、わずかな例外のほか凍害とみなして誤りがないと思う。(表 6)

このように、平均樹高は最も溫暖な G 地區の 1.72 m が最大で、最も寒冷な B 地區の平均 0.66 m より 1 m 以上もたかくなつている。この最も生長不良の B 地區のほか、寒冷で凍害がひどい E 地區と F 地區の平均樹高は、どちらも 1 m 以下である。

表 6 各地區の樹高 (m)

地 區	A	B	C	D	E	F	G
寒暖の傾向	暖	最寒	中	暖	寒	寒	最暖
平 均	1.48	0.66	1.22	1.59	0.91	0.77	1.72
最 大	4.68	1.14	2.71	4.12	2.02	1.72	3.15
最 小	0.40	0.28	0.32	0.43	0.47	0.26	0.36
現在本数	55	10	54	63	45	31	57
枯損本数	9	54	10	1	19	33	7
計	64	64	64	64	64	64	64
樹高階別本数							
3m以上	5	0	0	3	0	0	4
2~3m	6	0	7	17	1	0	17
1~2m	23	1	24	22	11	9	22
1m以下	21	9	23	21	33	22	14
計	55	10	54	63	45	31	57

各地區の平均樹高の順位は G, D, A, C, E, F, B だが、各地區の最大樹高の順位も大体おなじで、ただ温暖地區の G と A が入れ替っているだけである。そして A 地區の 3m 以上のもの 5 本——最大 4.68 m にたいして、寒冷な B 地區は 1.14 m のものがわずか 1 本あるだけである。

各地區の最小樹高をみると、造林ののち既に 12 年、最後に補植したものをさえ 7 年もたつているのに、山出し當時の苗高 (大体 0.25 m くらい) とどれだけのちがいもないのは意外である。しかもまた、1m 以下のものはどの地區にも相當あつて、凍害がいちばん少くほとんど無害とみてよい G 地區でも 14 本 (現在木の 25%)、D 地區は 21 本 (33%)、A 地區も 21 本 (38%)、凍害が最もひどい B 地區では現在の 10 本のうち 9 本 (90%)、E 地區には 33 本 (73%) あるのである。このように寒冷で凍害のひどいところほど多にちがいないが、どの地區にも相當な被害をうけた凍害木をみるのである。

また B 地區の枯損 54 本 (植栽本数の 84%)、F 地區 33 本 (52%)、E 地區 19 本 (30%) などと、寒冷な地區には枯損も多い。

以上を総合した大きい傾向として、比較的溫暖な G, A, D の三つの地區は比較的凍害がすくなく生長状態もよく、可なり寒冷な E, F, B の三つの地區は凍害が多く生長状態もわるく、C 地區はこれらの中にあつて、各地區の間の生長または被害の關係は、各地區の間の前記の寒暖の關係とほとんど同じであるといつてよい。

なお F 地區は前の表のように寒冷で、生長は B 地區について不良である。見取圖 (圖

1) ではC地区とおなじ中害区となつているが、それはこの地区のすぐ下手に土地の隆起があり、その部分の生長がよかつたため中害区として区劃線をひいた結果である。したがつて、もつと上手に区劃線をひくべきであつたかも知れない。そうすれば区劃線は、いつそう等高線にちかづいてくる。

地区の上長生長 研究をはじめたとき、各地区の上長生長は現にどのくらいであるかを知りたいと思つた。當時は植付の後12年(最後の補植の後7年)たつていたが、地区によつては激しい凍害が依然としてつづいており、軽微な凍害はもちろんすべての地区にあらわれていた。

昭和14年5月、發芽にさきだち前年(昭和13年)の軸梢の生長をはかつた結果はつぎのとおりである。測定は、前記の樹高の場合とおなじやりかたをした。平均は各地区の現在本数について計算している。

表7 各地区の上長生長 (m)

地 區	A	B	C	D	E	F	G
寒暖の傾向	暖	最寒	中	暖	寒	寒	最暖
平 均	0.12	0.04	0.08	0.11	0.07	0.04	0.14
最 大	0.76	0.12	0.27	0.41	0.19	0.15	0.43
本 数	55	10	54	63	45	31	57

このように、現在の平均樹高が最も大きいG地区は、現在の平均生長もまた最も大きく、反対に現在の樹高が最も小さいB地区は、現在の生長もまた最も小である。全体としてみると、比較的溫暖で凍害がすくないため、樹高が大きいところでは、現在、比較的よい上長生長がみられ、反対に寒冷で凍害がいちじるしく樹高の小さいところでは、現在も上長生長は不良である。また上長生長の平均の順位は G, A, D, C, E, F, B で、これら前にあげた順位とほとんどおなじである。

つぎに各地区の上長生長の最大をみると、A地区の0.76mをはじめとして、G地区の0.43m、D地区の0.41mは、造林後12~7年もたつているのだから必ずしもよい生長といわれませんが、一應順調な生長と考えることも許されるであろう。しかし寒冷なB地区は、最大の生長さえ0.12mにすぎず、E地区もF地区もほとんどこれと大差がない。そして上長生長の最大の順位はA, G, D, C, E, F, Bとなつていて、前記の順位のGとAが替つているだけである。

またもとに戻るが、比較的溫暖なG, A, D地区の或る個体のさかんな上長生長は一應正常であるとしても、地区全体の平均はそれぞれ0.14m, 0.12m, 0.11mにすぎないのであるから、決して正常な生長であるということができない。これはこれらの地区に今も凍害があり、すくなくとも一部の樹の生長が阻害されていることを示している。またB, E, F

地域の平均が、それぞれ僅か0.04~0.07 mであることは、寒冷なこれらの地域内のほとんどすべてが今も凍害に苦しめられている証拠である。

現在の上長生長は、現在の平均樹高が大きい地域ほどよいといつたが、おなじ地域のなかでも、大きい樹ほど一般に生長がよい。それは凍害が地表付近で特にいちじるしく、上層はこれが緩和されている結果である。つぎの表は昭和13年の上長生長を、各地域について樹高階別に平均したものである。樹高階の4m以上は4mをふくみ、3~4mは3m以上4m未満の意味で、以下これに準ずる。

表 8 樹高階別平均上長生長 (m)

地 区	A	B	C	D	E	F	G
4m 以上	0.41 (1)	•	•	0.34 (1)	•	•	•
3~4 m	0.39 (4)	•	•	0.26 (2)	•	•	0.30 (4)
2~3 m	0.20 (6)	•	0.15 (7)	0.17 (17)	•	•	0.20 (17)
1~2 m	0.12 (23)	0.00 (1)	0.09 (24)	0.08 (22)	0.11 (11)	0.05 (9)	0.16 (22)
1m 以下	0.06 (21)	0.04 (9)	0.06 (23)	0.06 (21)	0.05 (23)	0.03 (22)	0.05 (14)

() は調査本数

このように、各地域とも上位の樹高階ほど上長生長がよく、ことに A, G, D のように、比較的温暖な地域ではこの関係がはつきりしているが、E, F のように、寒冷で被害の甚だしいところでも、樹高をませば上長生長もます傾向をみせている。また地域別におなじ樹高階をくらべてみると、大体において温暖な地域の生長がよい。しかし1m 以下の場合、この関係はかなり混乱していて、結局どの地域も大きいちがいがなく、微々たる生長を、いずれも辛うじてつづけているだけである。

4. 凍害をうけたとどまつの形態

各調査地域の軸梢の凍害や、上長生長の状態等は以上のとおりであるが、これらのほか、現在の生育状態を毎木に判定し、優劣を定めることをやつてみた。尤もこれは主観的な判断であるし、優劣の段階の限界もはつきりしていないため、大体の傾向を知るにとどまつたけれども、地域別には、やはりはつきり差があらわれた。不可は近い将来に枯死するか、また生存していても、成木の見込がないものである。(表9)

このように、優級の生育をとげている樹があるのは A, D, G の温暖地域で、反対に不可級の凍害木は、寒冷な B, F 地域において断然多いことをしめしている。

またこの凍害地には、二又またはそれ以上の複梢木が非常にたくさんある。それらの中には、間もなく枯死するにちがいないもの、今後とも完全な生育は望めないもの、或いはまた、多少育ちおくれでも成木の見込が充分なものなど、状態はいろいろであるが、と

にかく複梢木の痕跡をあきらかに止めているものはすべて数え、反対に、かつての複梢木も、その痕跡が消えてしまったものは除いて表10をつくつた。

表9 生育の優劣

地区	優	良	可	不可	總本數
A	5	7	38	5	55
B	—	—	5	5	10
C	—	2	48	4	54
D	4	28	26	5	63
E	—	1	29	15	45
F	—	—	7	24	31
G	4	24	24	5	57

表10 複梢木の比較

地区	二又木	二又以上の複梢木	小計	總本數
A	16	21	37	55
B	5	5	10	10
C	18	27	45	54
D	24	9	33	63
E	22	12	34	45
F	8	16	24	31
G	14	2	16	57

同上の%

A	9	13	69	9	100
B	—	—	50	50	100
C	—	4	88	8	100
D	6	45	41	8	100
E	—	2	65	33	100
F	—	—	22	78	100
G	7	42	42	9	100

同上の%

A	29	38	67	100
B	50	50	100	100
C	33	50	83	100
D	38	14	52	100
E	49	27	76	100
F	26	52	78	100
G	25	4	29	100

結果はこのとおり複梢木が非常に多く、逆に複梢木の多いところは、凍害地であることをしめしている。最も温暖で凍害がすくないG地区の計16本(29%)を除けば、比較的凍害が軽微なA、D地区でさえ複梢木は全体の50%をこえ、その他の凍害地区では、ほとんど80%またはそれ以上である。しかも凍害がことに激しいB、F地区では、計100%、二又及び綜錯した二又以上の複梢木がともに50%をしめしている。

とどまつは單幹通直で、軸梢すなわち蕊が勢よく伸長していることが望ましい。しかし激しい凍害地では、軸梢の頂芽がしばしば凍死するため複梢となり、二つまたはそれ以上の数の梢頭がたがいに生長を競つたり、またしばしばほとんど上長生長がなく、軸梢の形はあつても機能をうしなつていたり、その他いろいろな状態で軸梢不明のものが多くあらわれる。凍害の如何によつてはまた、全く不明でないまでも、ようやく軸梢らしく推測できる程度のももたくさん現れる。これら不明または不明瞭なものもとより、現在の明らかな軸梢も、はじめから同じものが、軸梢としてそのまま生育をつづけることは、非常に激しい凍害地では不可能であるといつてよく、傷ついた軸梢を補うあたらしい軸梢の形成がうながされるから、凍害地には軸梢の交替の現象が多くみられ、しかも場合によつては、これを何回となく繰返している。

つぎの表は各地区について、軸梢が不明なもの、すなわち蕊がないもの、軸梢がやや

明らかなもの、すなわち蕊らしいものが認められるもの、及び軸梢が明らかなもの、すなわち蕊がよく立っているものに區別し、毎木に調査した結果である。また軸梢の交替があるものは、その回数とかかわりなく本数を数えて附記した。

表11 軸梢の状態

地 区	全く不明	やや明らか	明らか	總本数	軸梢交替
A	3	10	42	55	27
B	4	4	2	10	10
C	6	22	26	54	27
D	9	10	44	63	21
E	11	7	27	45	22
F	16	6	9	31	15
G	4	7	46	57	19

以 上 の %

A	6	18	76	100	49
B	40	40	20	100	100
C	11	41	48	100	50
D	14	16	70	100	33
E	24	16	60	100	49
F	52	19	29	100	48
G	7	12	81	100	33

被害が最も軽い A, G 地区では、蕊不明のものはすくなく、その明らかなものが著しく多い。反対に、寒冷な B, F 地区では、蕊不明のものが著しく多く、明らかなものはすくない。軸梢の交替も、寒冷地区に多い傾向があらわれている。すべての地区において、この交替は 30% 以上を占め、相当多いことがわかるが、古い痕跡は消えてしまったものがあり、実際はもつと多いと考えてよい。以上は軸梢のことだが、枝も同時に凍害をうけ損われている。この結果、枝の着生・分枝・伸長などがさまたげられ、一般に、分枝が不整で枝張りのすくない、まばらな貧しい樹冠が形成され、脱葉がともなえば一層貧しくみえている。しかし、帚状の複梢になつたものなどは、不規則に錯綜した、低い密な樹冠である。B, C, E, F 地区には、このような樹冠がたくさんあつて、一目で異状に気がつくが、同じ地区でも、低いところほど、樹冠の構造は全体として不良である。

5. 林縁の凍害緩和作用

林縁の保護作用はひろく知られているが、凍害を緩和する効果は相當はつきりしている。この凍害地のとどまつの生育は、前記のように斜面の低いところほど悪く、ほとんど凍死してしまつた箇所もあるくらいだが、の見取図にもあるとおり、**からまつ**の林縁の或る帯状地は、ほとんど凍害がないといつてよい丘の上とおなじような生育をとげ、

非常に目立っている。ただし、全く林縁の凍害緩和作用だけで良い生育をとげているのは、最も低いせまい或る區域だけで、ほかの大部分は急に1m以上高くなっているから、林縁の保護作用と、凍害をすくなくする地盤の高さの影響をうけている。

これらの事情をあきらかにする爲、林縁の植列16について必要な検討をした。第1列はからまつ林まで約4mで最もちかく、第16列は最もはなれていて、林道附近ではかつた距離は約33mである。また林道にちかい或る一線からはじめ、6尺方形植のとどまつをそれぞれの列ごとに数えて行くと、1~5列は18~44本目で雑木林につきあたり、6~16列は55本目でどいつたうひの造林地に移っている。これを50本目で打切り、各植列の現在本数と枯損本数(消失したのも含む)はつぎの表である。枯損のほとんど全部が凍害によるものであることは、附近の状況から判断して間違いないつもりである。

表 12 林縁の現在本数と枯損本数

植 列	1	2	3	4	5	6	7	8	9
現在本数	16	19	21	33	41	45	49	47	43
枯損本数	2	1	3	3	3	5	1	3	7
計	18	20	24	36	44	50	50	50	50

植 列	10	11	12	13	14	15	16	計
現在本数	33	40	38	38	38	39	44	584
枯損本数	17	10	12	12	12	11	6	108
計	50	50	50	50	50	50	50	692

この表をみると、第10列あたりから急に枯損を増していることがわかる。これは林縁から14~15mの距離で、大体からまつ林の高さにひとしい。また林道附近では、だいたい第16列あたりが、植列をみとめることができる最後の列で、これよりなお数米前進すれば、消失しているものが多く、植列を見出すことは困難である。

とどまつの生育は、大体からまつ林に近いほどよく、また地盤が高いほどよい。生育がよい所は、ここでは勿論凍害がすくない所である。また圖1のとおり高い所は次第にからまつ林から遠ざかり、雑木林がこれに替っている。この雑木林も、側方から凍害緩和作用を及ぼしている。

凍害を緩和されている林縁附近の樹高を、昭和14年の春に調査した結果は、前記の584本のうち、3m以上に生長したものが83本あり、その16本は4mをこえていた。つぎの表はこれを示しており、なお列ごとに最大樹高を附記して参考とした。

表 13 樹高 3 m 以上本数

列	4m以上	3~4m	計	最大樹高 (m)
1	4	7	11	5.44
2	3	5	8	4.75
3	3	4	7	4.96
4	1	3	4	4.36
5	1	9	10	4.72
6	2	8	10	4.46
7	1	13	14	4.27
8	1	9	10	4.00
9	0	3	3	3.55
10	0	1	1	3.13
11	0	0	0	—
12	0	2	2	3.06
13	0	2	2	3.70
14	0	1	1	3.50
15	0	0	0	—
16	0	0	0	—

このように、4 m 以上に生長しているのは第 8 列までで、15、16 列には 3 m に達したのものもない。それらの本数と最大樹高をくらべてみれば、林縁に近いほど生長がよくなっている。このことはまた、林縁を遠ざかるほど、凍害のため生長が悪いことを意味する。

図 6 は、3 m 以上のとどまつの位置を正しく地図に記入したもので、林縁の生育状態を概括的に判断するために都合がよい。記入を略した箇所を、3 m 以下の 584-83=501 本がしめしている。右下の部分は凍害のため生育不良である。3 m 以上のものは、こと

に地盤高 2 m 以上のからまつ林縁に多く、雑木林の林縁で一旦すくなくなっているが、地盤高 6 m 附近の林縁で、また多くなっていることがわかる。

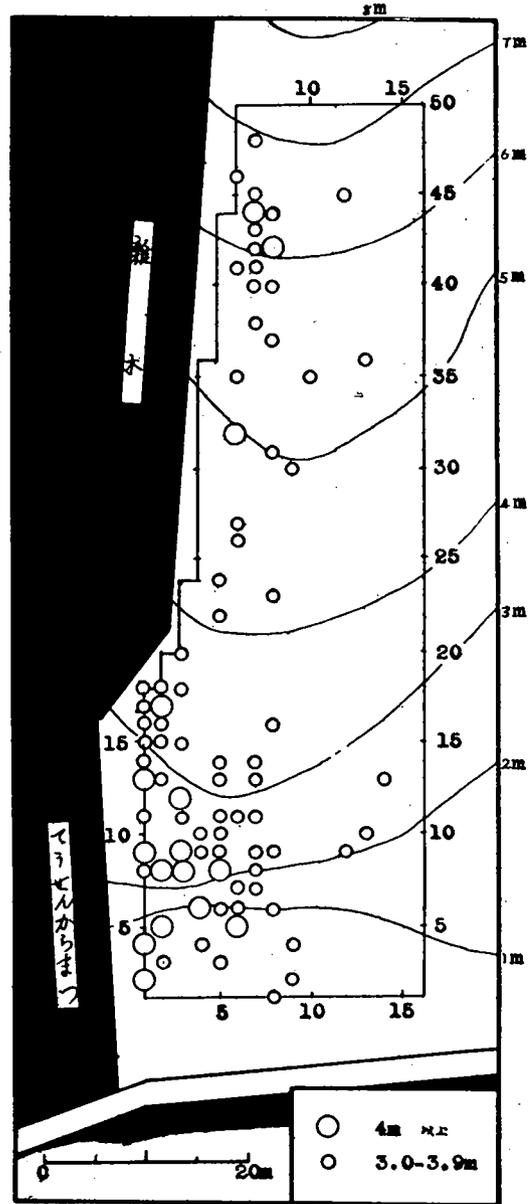


図 6 林縁におけるとどまつの生育

6. 林縁のとどまつの生長状態

林縁の生育は、前記のとおりからまつ林の影響をうけている箇所と、雑木林の影響をうけている箇所があり、からまつ林の影響は行番號1から15までのとどまつに及んでいると考えてよいから(圖6参照)、それぞれの列につき、行番號15までの平均樹高をもとめ、最大樹高と最小樹高その他を附記してつぎの表をつくつた。各列とも本来15本づつ植えたのであるが、枯損があるから現在の本数はすくなくなつており、樹高の平均はその現在木だけの平均である。

表 14 からまつ林縁の樹高

列	平均樹高 (m)	最大樹高 (m)	最小樹高 (m)	現在本數	枯損本數	總本數
1	3.16	5.44	1.03	13	2	15
2	2.63	4.75	0.96	14	1	15
3	2.92	4.96	1.52	13	2	15
4	2.25	4.36	0.76	15	0	15
5	2.95	4.72	0.84	14	1	15
6	2.64	4.26	1.20	13	2	15
7	2.55	3.82	0.74	15	0	15
8	2.29	3.22	0.50	13	2	15
9	2.15	3.55	0.99	14	1	15
10	1.39	2.24	0.32	11	4	15
11	1.64	2.88	0.46	12	3	15
12	1.08	3.03	0.40	14	1	15
13	1.20	3.70	0.54	12	3	15
14	1.57	3.50	0.32	11	4	15
15	1.17	2.47	0.61	10	5	15
16	1.37	2.99	0.42	12	3	15

このように、からまつ林に最もちかい第1列は、平均樹高が最大でまた最大の生長をとげた樹があり、2本の枯損を除けば最小の樹も樹高は1mに達している。一般に、平均樹高と最大樹高は、からまつ林にちかいほど良い生長をみせていることがわかるのである。しかし第9列から10列に移ると、急に生長がわるくなる傾向をしめしている。これはからまつ林縁の凍害緩和作用が、第9列まで相當はつきり働いているということである。からまつ林からここまでの距離は約14~15m、からまつ林の高さは約14mであるから、凍害緩和作用の有効距離はこの場合だいたい林高に等しい。

第10列以下にも、からまつ林の影響が全くないわけではない。第16列は、からまつ林から林高の約1.5倍はなれているが、微弱ながら有利な關係はあるらしく、16列以下は甚だしい凍害をうけている。しかしこの程度では實際には問題にならない。

つぎの表はおなじ場所の **とどまつ** を樹高階別に数えたものである。表の 5 m は 5 m 以上、4 m は 4 m 以上 5 m 未満の意味、以下これに準ずる。

表 15 樹高階別本数

列	5 m	4 m	3 m	2 m	1 m	1m以下	枯損	計
1	2	2	4	1	4	0	2	15
2	0	2	3	5	3	1	1	15
3	0	3	1	7	2	0	2	15
4	0	1	3	3	6	2	0	15
5	0	1	7	4	1	1	1	15
6	0	1	3	7	2	0	2	15
7	0	0	6	5	2	2	0	15
8	0	0	3	5	4	1	2	15
9	0	0	2	4	7	1	1	15
10	0	0	0	4	4	3	4	15
11	0	0	0	5	4	3	3	15
12	0	0	1	0	6	7	1	15
13	0	0	1	0	4	7	3	15
14	0	0	1	2	4	4	4	15
15	0	0	0	1	5	4	5	15
16	0	0	0	3	4	5	3	15

第 1 列は 5 m 以上が 2 本、1 m 以下のものはなく、樹高生長は最も良好、**からまつ** 林をはなれるほど樹高生長は劣っている。それが凍害の結果であることは勿論である。この表も、9 列と 10 列の間に或る一線の存在をしめしており、10 列以下には 3 m 以上に達したものがほとんど無くなり、反対に 1 m または 1 m 以下の本数を増して現在木の過半数をしめている。

この林縁の **とどまつ** は、**からまつ** 林の有利な作用をうけるとともに、また地盤がたかくなっているため有利な作用をうけている。図 6 のように、林道附近のほとんど平らかな地盤は、第 6 行目あたりから急に 1 m ほどたかくなり、その先はゆるやかな斜面になっている。この斜面の **とどまつ** (第 11~15 行) が、その下の平地の **とどまつ** (第 1~5 行) より、全体としてよい生長をとげていることつぎの表のとおりである。(表 16)

このように、平均樹高は、若干の例外を除けば地盤のたかい方が大きい。最大樹高も最小樹高も、過半数はやはり地盤のたかい方が大きい。このような地形では、地盤がたかくなれば低気温は緩和されるのだから、凍害もまた緩和される。したがって樹高ばかりで

1) 林縁の凍害緩和作用が実際に有効な距離は、林高と略ひとしいか、または林高までにいたらぬ距離と考えるべきである。佐々木準長助教授も、實地の経験から、樹高の 2 倍はないということを力説している。弟子風に於ける臨時造林事業について。昭和 27 年、80 頁。なお詳細は 今田敬一、晩霜季における林地の低気温。29 頁。

表 16 からまつ 林縁の樹高比較

行 列	平均 (m)		最大 (m)		最小 (m)		本 数	
	1~5	11~15	1~5	11~15	1~5	11~15	1~5	11~15
1	2.87	3.32	4.40	5.44	0.35	1.03	5	5
2	2.66	2.56	4.75	3.69	0.96	1.15	5	5
3	2.39	2.94	2.62	4.30	1.80	1.52	4	5
4	2.33	1.25	3.40	1.80	1.05	0.76	5	5
5	2.54	2.79	3.99	3.68	1.05	0.84	5	4
6	2.38	2.73	4.26	3.52	1.20	2.06	4	4
7	2.14	2.45	2.92	3.82	0.74	0.87	5	5
8	2.13	2.16	3.00	2.94	0.50	1.15	4	4
9	2.65	1.89	3.55	2.49	1.59	1.70	4	5
10	0.74	1.50	1.11	2.16	0.32	0.70	3	5
11	0.54	2.10	0.62	2.88	0.46	1.11	2	5
12	0.63	1.26	0.99	1.46	0.40	1.03	5	5
13	1.05	0.86	1.46	1.15	0.79	0.54	3	4
14	1.35	2.09	2.37	3.50	0.32	0.34	2	5
15	0.87	1.08	1.16	1.81	0.61	0.53	3	4
16	1.73	1.37	2.24	.99	0.76	0.79	3	5

なく、現在木の数にも影響し、地盤がたかければ現在木が多く、枯損(主として凍害)したものが少ない結果がでている。地盤がたかく、しかもからまつ林にちかい林縁は、凍害が最も緩和されていて生長がよい。前の表を総合すれば、第1列から第3列あたりまでが、この最もめぐまれた状態にある。圖6もまた、3m以上に達した比較的優良木が、主としてからまつ的林縁附近及び比較的の地盤のたかい所に散在していることをしめしている。

なら等の造林地が壯齡の雑木林化した林縁も、凍害を緩和する作用をもっていることを、とどまつの生育状態がしめしている。この作用は第5列からみとめられるが、同時に強度の庇壓が生長を害しているから、第6列以下を検討することとして次の表をまとめた。

表 17 雑木林の林縁の樹高比較

行 列	21~30 (m)	31~40 (m)	41~50 (m)	總平均 (m)	本 数	枯 損
6	2.35	1.99	2.51	2.29	28	2
7	1.80	2.22	2.95	2.34	29	1
8	2.17	2.27	2.45	2.30	29	1
9	1.71	1.90	1.66	1.76	24	6
10	1.32	1.39	1.25	1.32	22	8
11	0.93	1.13	1.28	1.15	23	7
12	0.95	1.64	1.44	1.39	21	9
13	0.71	1.67	1.74	1.52	21	9
14	1.12	1.72	1.29	1.34	23	7
15	1.11	1.48	1.24	1.30	24	6
16	1.25	1.56	1.25	1.35	27	3

これは雑木林の林縁にあたる行番號 21 から 10 行づつまとめた平均樹高で、現在木で計算している。また總平均は、三つの平均樹高から計算せず、樹高の總計と現在の總本數を用いて計算した。

このように、すべての平均樹高をくらべてみると、8 列と 9 列の間に可なりはつきりした區別があり、また現在本數にも、従つてまた枯損本數にも、8 列と 9 列の間におなじような區別がみられる。それゆゑこの雑木林の林縁の凍害緩和作用は、だいたい 8 列まで及んでいてと考えてよいと思う。雑木林の高さは **からまつ** 林とおなじくらいであるのに、この緩和作用の區域が **からまつ** 林よりも狭い主なわけは、雑木林の土地が低く、有効な林高が低くなつてゐる結果である。(圖 1 参照)

またこの林縁は、行番號が多くなるほど地盤が高くなり、50 行目附近では 21 行目附近より 3 m も高くなる。そのために凍害が緩和されていることも、表の中にあらわれている。ただし、林縁からはなれば地盤の隆起がすくなく、また林縁の緩和作用もなくなるので、14 列あたりから、どこも同じようにあまり良くない成育である。

林縁の **とどまつ** の上長生長は、昭和 14 年の春の生長を調査しただけであつた。調査

表 18 林縁の上長生長

樹高階	平均 (m)	最大 (m)	本數
4 m 以上	0.31	0.56	16
3 ~ 4 m	0.31	0.84	67
2 ~ 3 m	0.20	0.49	150
1 ~ 2 m	0.12	0.29	193
1 m 以下	0.06	0.16	53

したのは前記の 16 列で、この植列とは關係なく、すべてを五つの樹高階にわけ、凍害木の生長の傾向をもとめてみた。

結果は前記の七つの地區の場合と非常に似ており、ことに 2 m 以下の樹高階については、ほとんどおなじ値がでた。一般に、低い樹ほど上長生長は阻まれていて、この場合 1 m 以下のものは、

最大の生長さえ僅か 0.16 m にすぎない。従つて激しい凍害をうけた **とどまつ** の將來は、林縁でも希望がもてないということになる。

7. 現在の状況

研究をはじめてから 5 年月の昭和 19 年、一部の **とどまつ** に極めてよい影響を與えていた **てうせんからまつ** 林は軍用のため伐採され、終戦後の數年にわたつて、この凍害地は全く放置されていた。昭和 24 年の秋、再び機会をえて訪れたときは、全域が萌芽と侵入してきた若い雑木のためにほとんど埋まり、林内を歩くことはもちろん、林内を見透すことさえ困難な有様であつた。昭和 26 年の春、粗い除伐が行われたとき、わずかな通路をつくり最小限度の調査を行い、翌春もまたこれを繼續した。

この結果によると、昭和 14 年に造林地を踏査して目測できめた 圖 1 の激害と甚害の二つの地區の **とどまつ** はほとんど消失し、細長い不整形の弱々しい殘存木が、わずか散

存しているだけであつた。その外側の、かつて微害と判定した地区は、散生の傾きはあるが一應生育し、無害と判定した地区では、他の地区と明らかにちがう良い生育をとげてもはや閉鎖している。この生育がよい丘の中腹の斜面と、伐採されてしまつた曾つてのからまつ林の林縁のとどまつは、今日6~7mになつたものが相當あり、遠くからみると、凍害地区の雑木を抜きしかも鬱蒼としていて、前より一層目立つ現状である。

調査地区附近の現状 昭和14年にもうけた前記の7つの調査區は、戦時戦後の特別な事情もあつて手入れができず必要な標識の大部分を失つたため、26年の調査のとき、すべての箇所を前回と一致させることを不可能にした。また充分な努力もえられなかつたので、今回は前回とできるだけ同じ位置をえらぶようにつとめ、面積も狭くして6m×6mとし、前回の7地区のうちの5地区について調査をした。この際も調査區の方向を植栽の列に合せたから、それぞれ4×4=16本のとどまつが植えられていたはずである。16本では前回の64本に比して非常にすくないが、大体の傾向はわかつたつもりである。

つぎの表は各地区の現在の樹高の平均、樹高の最大、前回とことなり今回は測れるようになった胸高直径の平均、その最大を列記したもので、残存本数は凍害の有無、その程度にかかわらず現に生育している本数、枯損本数は16本ずつ植えられていたものとして計算した。その中には現に枯損木として残つているものもあるし、消失してしまつたものもある。

表 19 各地区の生長

昭和26年5月14日調査

地 區	A	B	E	F	G
平均樹高 (m)	4.78	—	1.95	1.88	5.06
最大樹高 (m)	8.20	—	2.94	2.85	6.67
平均直径 (cm)	6.13	—	3.20	4.33	6.84
最大直径 (cm)	13.2	—	4.4	6.5	10.0
残存本数	10	0	4	3	12
枯損本数	6	16	12	13	4

このように、最も凍害が著しかつたB地区にはもはや1本の残存木もない。これは調査した區域がせますぎるためでなく、附近の状態もまたおなじことである。Bについて凍害が著しかつたF地区には3本の残存木があるが、こゝは標準として成績がよすぎ、ほとんど残存木がないのが附近の状態である。Eも前から成績の悪いところで残存木はわずか4本、これらのひどい凍害地の残存木は生育がわるく、すでに鬱閉しているA、D、G地区の林木にくらべると、平均樹高も最大樹高も1/2またはそれ以下であり、また最もよい生長をとげている曾つての林縁木のなかには、この表にはないけれども、すでに11m以上の高さになつているものもあるから、これにくらべれば1/3以下にすぎない貧しい生

長である。

林縁附近の現状 側方からいちじるしい凍害緩和作用を及ぼしていたからまつ林は、前記のとおり伐られてしまつたが、それまでに林縁のとどまつは、安全に育ちうるまでに生長していた。昭和26年の調査によると、曾つてからまつの保護をうけたと考えられる林縁には、昭和17年以後にうけた致命的な凍害はなく、しかも全体として、どこよりもよい生長をとげていた。ことに林道ぞいの低所から急に1mほど高くなつている丘の肩の附近に、最もよい生長をみることができた。

非常に目立っている事實は、林縁のよい生長が、林道ぞいの低所では9列目で急に終り、10列目から先は、極く生育のわるい樹が数本しか残っていないことである。尤も丘の肩のところでは、14列まで可なりよい生育をみせ、15列目から急にほとんど消失している。しかしこれも10mほどの間だけで、その先は再び9列目あたりでよい生長が終り、やがて斜面の高さの影響が大きくあらわれてくる。このことは、12年前の昭和14年にもみとめることが出来たが、今では一層はつきりしてきた。

先年は林縁のとどまつを16列、毎木に數百本調査したが、今回は樹高をまし、また林地の大部分が叢林化して作業を困難にしたので、前記の方法に準じた小面積の調査で大体の傾向を知ることにした。

つぎの表はかつての林縁のとどまつの現状をしめす。No. 10 (a) は低氣温の観測點 No. 10の近くにもうけた 6m×6m の地域 3, 4, 5, 6 列の夫々4本づつ計16本をふくむ。No. 10 (b) はこの眞上の丘の肩にもうけ、おなじ植列におなじ區劃をし、おなじ本数をとつたものである。なおこれと比較するため、観測點 No. 11 附近で、第11, 12, 13, 14列についておなじことを測つた果結を記入した。

表 20 林縁のとどまつの生長

調査の場所	No. 10 (a)	No. 10 (b)	No. 11
平均樹高 (m)	5.51	6.42	1.04
最大樹高 (m)	8.80	11.60	1.37
平均胸高直徑 (cm)	6.97	8.26	2.90
最大胸高直徑 (cm)	12.00	18.20	3.70
現在本數	14	12	3
枯損本數	2	4	13
計	16	16	16

この表を前の表とくらべると、かつてのからまつ林縁で、とどまつは最もよい生長をとげていることがわかる。ことに No. 10 (b) では、高さ11m、直徑8cmをこえているものがあり、凍害地の全域を遠く望むとき、この附近のよい生長は特別に目立っている。

No. 11にはただ3本のこつているだけで、最大のものも1.37m、最小のものは0.65mであつた。しかしこれでも附近のいちばん良いところで、このあたりからB地区にいたる広い低地にはほとんど残存木がない。

凍害をうけたとどまつの枯損 この凍害地のうち、寒冷で凍害のはなはだしい地区にうえたとどまつは、次第に凍死しやがてまた腐朽して消えていつた。これは昭和14年以來の最初の數年間に、興味をもつて觀察しつづけたことであつた。しかしまた、凍害の輕微なところ——たとえば丘の頂にちかい高みやからまつの林縁などでは、凍死は造林後の數年間だけで、あとは被害があつても凍死することはほとんどなく、次第に勢をえて生長していた。

このことについて別に試験をしたけれども、造林地についてはつぎのような事實があつた。それは曾つてのからまつの林縁で行つた調査だが、第6と第7のとどまつの植列の間にもうけた刈拂道をつたい、先年の調査と照し合わせながら、昭和16年以來のあたらしい凍死木を調べたところ、からまつの保護作用で初めから比較的よく育つていた第1~9列には該當するものが全くなかつた。第10~16列は灌木などの發生がいちじるしく、従つてあたらしい凍死木もあるように思われたが極度に見透しがわるく、そのため甚害及び激害地になつていた林道に近い低地の部分だけ調べることにし、それらの植列をふくむ11m×9mを區割しつぎの結果をえた。この區割に、はじめは7×6=42本のとどまつが植えられていたはずである(補植苗は別として)。

表 21 とどまつの枯損

植 列	10	11	12	13	14	15	16	計
最初の植栽本數	6	6	6	6	6	6	6	42
残存本數(昭16)	3	3	5	4	2	3	3	23
〃 (昭26)	1	0	1	1	1	0	0	4
昭和16年以來の枯損	2	3	4	3	1	3	3	19
最初の植栽以來の枯損	5	6	5	5	5	6	6	38

このように、もと42本のとどまつは、昭和16年の春までにほとんど半減して23本になつていた。しかもその後も枯損をつづけ、現在——昭和26年にはわずか4本に減じてほとんど全滅している。残存木のうち、第14列にのこつた1本は高さ4.5m(昭和14年2.87m)、他の3本はどれも1m内外である。この特に大きくなつたものも、枝張りがすくない瘦せた幹で、梢頭附近は複梢になつており、他は一層生育がわるく、近い將來にやはり枯れるか、精々のこつても不良木にすぎない。従つてからまつから21m以上はなれているこのあたりに、林縁の保護作用を認めることは困難である。

この造林地は昭和2年の新植ののち、5年と7年に補植している。表の枯損本数は、補植がなかつたものとして数えているけれども、実際は新植ののち数年で大部分が枯損して昭和5年の補植となり、昭和7年にもまた、大部分を補植しなければならなかつたことが想像される。従つて實際は42本のうち4本が残つたのではなく、多分これよりはるかに多い苗木のなかから、僅か4本が残つたものと考えてよい。

B. 凍害の試験

8. 植栽地とその低気温

植栽地・植栽の方法 この凍害造林地のとどまつが、現在の状態になつた経路を知るため、あたらしく苗木を植えて凍害試験を実施した。

昭和14年5月11日、造林地のなかに適當と思われる箇所を10箇所えらび、それぞれ1.2×1.2mを區劃、草と地下のすべての根を除いてよく耕し、當時密生していた周邊の雜草と、疎生していた萌芽と灌木の類は直接の影響がない程度に刈拂い、各10本づつとどまつ苗を植栽した。苗木は苫小牧演習林で養成した5年生、平均苗高20.4cm、平均根元直径1.04cm、優良な苗木ではなかつたが、軸梢の完全なものを特にえらんでいる。床は平床で中央に30cmの間隔をおいて4本、その前後におなじ間隔で互の目に3本づつ植えて合計10本とした。最も熟練した一人の工夫が、すべてを出来るだけ丁寧に、またおなじように植付けたから、植方による生育の差はほとんどなかつたと思う。

昭和15年5月9日、前年植えたものに枯損が現われはじめていたし、また植栽本数も不足と考えられたので、前年の箇所につづけて同じ床をつくり、すべて前年と同じように各10本づつ植えて補充した。とどまつ苗はやはり苫小牧演習林養成の5年生、平均樹高22.1cm、平均根元直径1.04cm(前年と同じ)、これでそれぞれ20本づつ10箇所、計200本植えたことになつた。

これらの試験地のうち7箇所は前記の凍害調査地區の中にもうけ、他の3箇所はからまつ的林縁附近にもうけた。また1~10mをへだててどの試験地にも気温の観測點をもうけたから、地上0.25mの最低気温と照しあわせながら、健全苗の凍害の状態をみる事ができた。

植栽した箇所は圖1に記入してあるが、なお次表のとおりである。地區は植栽地所在の前記凍害調査區、気温観測點はそれぞれの調査區のなかにあつてその気温を代表し、従つてまたそれぞれの植栽地の気温をも代表する地點、距離は、この観測點から植栽箇所のおよそ中央部までの最短距離である。林縁には特にもうけた二つの観測點がある。

表 22 植栽地一覽

植栽地	地 區	気温観測點	観測點からの 距 離 (m)	備 考
a	A	No. 1	5	
b	B	No. 2	4	
c	C	No. 4	5	
d	D	No. 5	5	
e	E	No. 6	3	
f	F	No. 7	4	
g	G	No. 8	6	
h	林縁	No. 10	4	からまつ林から5m, 平地
i	〃	No. 10	10	〃 12m, 丘の高み
j	〃	No. 11	4	〃 25m, 平地

植栽地の最低気温 あたらしくとどまつ 苗をうえた植栽地 10 箇所のうち, a, b, c, d, e, f, g の最低気温は, ちかくにある観測點 No. 1, 2, 4, 5, 6, 7, 8 の観測値とそれぞれ大差がないと考えられる。表 23 は昭和 14 年 5 月の観測値で, 6 月は 1 日と 5 日に弱度の霜日があつただけなので省略する。前記の通り, No. 4 の観測法は他と少しちがう。

表 23 最低気温 °C, 地上 0.25 m

昭和 14 年 5 月

植栽地	a	b	c	d	e	f	g
地 區	A	B	C	D	E	F	G
観 測 點	No. 1	No. 2	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
V. 1	-3.0	-3.7	-3.5	-2.9	-3.9	-3.6	-1.5
4	-2.2	-3.2	-3.4	-2.0	-3.2	-2.5	-0.3
5	-1.6	-3.0	-2.7	-2.0	-2.8	-2.6	-0.5
6	-1.6	-2.6	-2.8	-1.8	-2.7	-2.3	-0.5
8	-3.2	-4.6	-4.5	-3.1	-4.5	-4.2	-0.9
10	-0.3	-1.0	-1.4	-0.2	-0.9	-0.8	+1.1
13	-2.2	-3.5	-3.8	-2.5	-3.0	-3.3	+0.4
14	-5.2	-8.2	-7.6	-5.9	-8.0	-7.5	-3.5
16	-5.6	-7.0	-7.2	-5.7	-7.1	-6.7	-4.3
17	-4.2	-5.5	-7.1	-3.9	-5.3	-4.8	-2.3
18	-3.0	-4.2	-4.0	-2.8	-4.0	-3.6	-1.4
霜日平均	-2.92	-4.23	-4.36	-2.98	-4.13	-3.81	-1.25

残りの植栽地 h, j のための観測は, No. 10, 11 において翌 15 年と 16 年に施行した。この時の他の観測點は No. 1, 2, 8 の 3 點で, 16 年には No. 1 も観測を中止した。これは各観測點の低気温の相互関係がわかり, 測らなくとも全体の傾向がだいたい推察できたからである。次の表は昭和 15 年と 16 年の 5 月の観測値で, 15 年の 6 月は霜日がなく, 16

表 24 最低氣溫 °C, 地上 0.25 m

昭和 15 年 5 月

植栽地 地區 觀測點	a A No. 1	b B No. 2	g G No. 8	b . No. 10	j . No. 11
V. 1	-9.5	-10.8	-7.2	-10.2	-9.8
2	-2.7	-3.4	-0.6	-3.1	-3.2
5	-5.6	-6.8	-3.6	-6.3	-6.8
6	-2.1	-2.4	-0.6	-2.5	-2.3
8	-5.5	-6.9	-3.7	-6.6	-7.1
9	-3.5	-4.5	-1.5	-4.5	-5.0
10	-5.4	-6.7	-3.1	-6.5	-6.8
11	-7.1	-7.9	-5.1	-7.8	-8.1
12	-3.1	-3.8	-1.2	-3.5	-3.9
15	-5.2	-6.0	-2.9	-5.7	-6.5
16	-2.6	-2.9	-0.6	-3.1	-3.2
20	-4.1	-4.7	-1.8	-4.2	-4.6
21	+0.4	-0.1	+2.3	+0.1	±0.0
24	-3.2	-4.1	-0.1	-3.8	-4.2
26	-4.4	-5.1	-2.0	-4.9	-5.1
霜日平均	-4.24	-5.07	-2.11	-4.84	-5.11

表 25 最低氣溫 °C, 地上 0.25 m

昭和 16 年 5 月

植栽地 地區 觀測點	b B No. 2	g G No. 8	h . No. 10	j . No. 11
V. 1	-9.0	-4.8	-7.5	-8.9
2	-3.4	+0.2	-1.8	-2.7
4	-7.6	-4.5	-5.1	-7.3
7	-9.5	-6.5	-7.3	-9.6
8	-1.6	+1.6	+0.2	-0.7
9	-5.2	-2.5	-3.7	-4.7
11	-6.2	-2.8	-4.6	-5.7
12	-6.8	-4.6	-5.6	-7.1
13	-11.2	-7.1	-9.6	-10.7
14	-1.1	+1.6	+0.1	-0.5
15	-6.7	-3.2	-5.1	-6.4
16	-10.9	-6.5	-8.9	-10.1
17	-5.4	-2.2	-3.8	-5.1
18	-4.8	-1.7	-3.6	-4.5
20	-1.7	+0.4	-0.7	-1.4
22	-2.1	+0.7	-1.2	-1.8
29	-1.2	±0.0	-0.5	-1.0
31	-2.1	-0.4	-1.5	-1.6
霜日平均	-5.36	-2.35	-3.90	-4.99

年は6月1日に -3.1° まで下り、9, 10, 14, 16日に、それぞれ -1° 前後の霜日があらわれている。(表24, 26)

経験によると、造林地のとどまつに凍害があらわれるのは霜日のすべてではなく、だいたい -4° 以下の霜日である¹⁾。またこの造林地のとどまつの芽の凍害は、5月の上旬からはじまっているが、ことに5月10日ごろから重要な段階にはいつている。それゆえ5月10日以後の -4° 以下の霜日を、特に凍害日とみて間違いない。この重要な日は、次のようにあらわれていた。

表26 凍害日

年	月	日
昭和 14	5	14・16・17・18
〃 15	5	10・11・15・16・20・21・24・26
〃 16	5	11・12・13・15・16・17・18

これらの有害な霜日には、10箇所の植栽地のうちどこかに凍害が起つているが、温度は場所によつてちがうから、どこも同じように被害をうけているのではない。b, e, f, jのように、いつも著しく寒冷なところでは、その都度はげしい凍害をうけるとしても、比較的温暖なところでは、被害の程度がすくないばかりでなく、しばしば被害をまぬかれてさえいるのである。たとえばgにおいて、 -4° 未満の霜日を無害とすれば、昭和14年の有害な霜日は5月16日ただ1日だけで、15年もまた5月11日だけ、16年も5月12, 13, 16日の3日にすぎなかつた。しかも温度は、寒冷な場所より 4° 前後までたかいことがあること(昭和16年5月13, 16日)表のとおりである。この結果として、10箇所の植栽地は、はじめ同じであつたにもかかわらず、それぞれちがう凍害の容態をあらわすようになった。

iの植栽は、主としてaと比較するための補助であつたから、最低気温を連続してはからなかつた。ここは周囲のとどまつの生育状況から判断して、aよりも最低気温がたかいことが想像され、それはaよりも一層からまつ林に近いためにちがいなかつた。iはまた、からまつ林からの距離はhと大差ないが、2mほど地盤がたかくなつているため、hより高温であることも想像された。しかしiの最低気温をはかつたのは僅か數回で、ことに晩霜季の観測がなかつたのは残念であつたが、つぎの例はiその他の観測點の低気温の相互関係をよくしめしている。これは初冬の観測であるが、積雪はなく、また地面の枯草が早春のような状態であつたから、晩霜季の有害な霜日には、丁度このような低気温の關係があるとみて差支えがないように思う。

1) これは實地の経験温度であるが、同じようなことが他でもいわれている。稻垣乙丙, 新編農業氣象學, 247-8頁。鈴木清太郎, 農業氣象學, 118頁。大後美保, 農業氣象通論, 178頁。

表 27 最低気温 °C, 地上 0.25 m

観測点 植栽箇所	No. 10 b	· i	No. 11 j	No. 1 a	No. 2 b	No. 8 g
昭15. XII. 1	-5.2	-4.2	-6.7	-5.5	-7.2	-4.4

このように、iの最低気温はgにちかく、aよりも、またhよりも高温である。

9. 凍害の経過

植えたとどまつは、ほとんどおなじ苗であつたのに、わずか2~3年で、植えた場所による生育の差があらわれた。その原因が主として晩霜季——特に5月の凍害によるものであることは確かである。このことについて、始めはいろいろ疑問をもつたが、検討をかさねた結果、いよいよ間違いがないという確信に達した。

試験を實施した苫小牧演習林の秋は寒冷で、9月下旬には氷点以下の気温がしばしばあらわれ、現に2回目の植栽をした昭和15年の9月30日には演習林内の露場で -4.1° 、最も寒冷な植栽地b(気温観測点No. 2)は -10.6° に降つている。これを例外としても、寒冷箇所の10月には、 -10° 以下の低温がすくなくも數日あらわれる。11月と12月の観察によれば、秋の低温にふれた育ちおくれの新葉はしばしば黄變または赤變し、箇所と個体によつては、育ちおくれたものばかりでなく、針葉のほとんどすべてが黄または赤味を帯びることもある。しかしそのために枯れるほどのことはなく、あたらしく形成されている冬芽にも、被害をみとめたことはほとんどなかつた。

10月から初冬(根雪はおそい)にかけて、霜柱が形成されることがある。尤も、どこも粗鬆な火山灰土で排水状態もよいのだから、内部は別として、表土の霜柱がうえた苗木を拔出したり、根を露出させたりすることは全くなく、新植の年、箇所によつて幾分ゆるんだ根元を、念のために踏みかためたことがあつた程度であつた。おなじように、消雪後の霜柱の害もないのである。

初雪は11月の上旬でも、根雪はたいてい12月の上旬、年によつてはもつと遅れ、昭和15年は12月30日であつた。冬の温度はいちじるしく低く、寒冷な植栽箇所では12月のうちに -20° 内外に降り、嚴冬季1~2月には -30° をこえる日もでてくる。苗木時代のとどまつは、嚴冬の低気温に直接ふれると凍死することもあるが、植栽地では、どこも50cmほどの積雪に保護されて冬をすごし、ただ偶然雪の上に出た部分が傷けられたことがあつただけである。

1) 原田泰博士も、林木、特に雑苗の被害は、ほとんど晩霜のみによつて生ずるとし、早霜の被害は少ないという。森林氣象學, 195頁。

消雪は3月下旬になる。植栽地はおなじように地被を除き土壤を露出してあるから、雪融け頃はどこも可なり深く固く凍結している。雪融水は斜面をすこしづつ流れて低い所に集まる傾きがあるが、どの植栽地にもながく停滞することはなく、上層のやや多量の水も、凍土の融解につれて速やかに吸収される。やがて気温は昇りはじめ、それぞれの植栽地の4月の最低気温は、 -15° を下廻る日がほとんどなくなり、芽鱗にかたく包まれているとどまつの芽は、4月も依然としてほとんど安全であるが、やがて有害な5月の発芽季がちかづいてくるのである。

この凍害地のとどまつの冬芽が、春になつて膨みはじめるのは5月上旬である。まず日當りのよい高所からはじまり、次第に比較的寒冷な低地におよんで行く。年によつて多少ちがうが大きいちがいはない。5月15日ごろは、最も暖い場所で、芽が綻びるか綻びないか間際の状態になり、新緑が目立つてくるのは、5月の下旬から6月上旬の間である。尤も、これは、ここに造林したとどまつのことで、試験にうえたとどまつ苗の発芽は、これよりもすこし遅れる傾きがあつた。昭和16年の観察によると、丘の中腹にあつて最もあたたかいgのとどまつ20本の平均発芽日は、軸頭の側芽が5月24日、頂芽が6月5日、また林縁にあるあたたかいiにおける20本は、側芽が5月27日、頂芽が6月4日、またやや土地が高く比較的あたたかいdの17本は、側芽が6月4日、頂芽が6月8日であつた。低気温が最も有害にはたらくのは、冬芽がようやく膨んだ5月10日頃から、発芽したばかりの新梢がさかんに伸びている6月のはじめにいたる大体40日くらいで、ことにこの季節のはじめ、5月10日ころからの2週間は、低温があらわれる頻度も多く、また低温そのものもきびしいため非常に有害である。

5月下旬になつて発芽しない芽をしらべてみると、膨らみかけた芽鱗のなかで、微細な針葉が小さく曇られたまま褐色をおびて凍死している。寒冷な箇所では、このように発芽以前に凍死してしまうものが非常に多かつた。たとえば、昭和16年に観察した、最も寒冷な植栽地bにおける12本のとどまつ苗の平均発芽日は、側芽が6月29日、頂芽が6月12日で、側芽と頂芽の発芽の順序が正常の逆になつているばかりでなく、また非常におくれているが、これは頂芽も側芽もほとんど発芽の前に凍死し、不定芽が後からおくられて発芽して来たためであつた。

発芽季にはまた、有害な低気温があらわれるたびに、わずかに綻びた芽、萌えいでた新葉、ようやく伸長した梢も凍死し、ことに綻びた芽の凍死は、膨んだ芽の凍死とともに、毎年ほとんど無数にみるところであつた。この結果はまた、6月上旬から7月にかけての二次的な不定芽の盛んな発芽となり、また凍害地特有の複梢を形成する原因となつた。

夏はまた凍害をうけた針葉の脱落、凍害をうけた小枝の枯死、衰弱した苗木自体の枯死を促進し、昭和14年春の植栽直後からはじまつた凍害の實態は、間もなく植栽の場所

苗 番 號	植栽地 i			林縁 ₂ (高所)			暖		昭 26 春
	昭 14 春 秋	昭 15 春 夏 秋		昭 16 春 夏 秋			昭 18 春 夏		
1	○	○		○	○	○	○	○	○
2	○	○		○	○	○	○	○	×
3	○	○		○	○	○	○	○	○
4	○	○		○	○	○	○	○	○
5	○	○		○	○	○	○	○	○
6	○	○		○	○	○	○	○	×
7	○	○		○	○	○	○	○	○
8	○	○		○	○	○	○	○	○
9	○	○		○	○	○	○	○	○
10	○	●		○	○	○	○	○	○
11				○	○	○	○	○	○
12				○	○	○	○	○	○
13				○	○	○	○	○	○
14				○	○	○	○	○	×
15				○	●	●	○	○	○
16				○	○	○	○	○	○
17				○	○	○	○	○	○
18				○	○	○	○	○	○
19				○	○	○	○	○	○
20				○	○	○	○	○	○

苗 番 號	植栽地 j			林縁 ₃ (低所)			気温観測點 No. 11		昭 26 春
	昭 14 春 秋	昭 15 春 夏 秋		昭 16 春 夏 秋			昭 18 春 夏		
1	○	●		×	×	×	×	×	×
2	○	○		○	●	●	●	×	×
3	○	○		○	●	●	×	×	×
4	○	○		○	●	●	○	○	×
5	○	○		○	○	○	○	×	×
6	○	○		○	×	×	×	×	×
7	○	○		○	○	○	○	×	×
8	○	○		○	○	○	○	×	×
9	○	○		○	○	○	○	○	×
10	○	●		○	○	×	×	×	×
11				○	○	○	○	○	×
12				○	○	○	○	○	×
13				○	○	○	○	○	×
14				○	○	○	○	○	×
15				○	○	○	○	○	○
16				○	○	○	○	○	×
17				○	○	○	○	○	×
18				○	○	○	○	○	×
19				○	○	○	○	○	×
20				○	○	○	○	○	×

による被害状態の段階が、非常にはつきりわかる程度にまで進行した。

植栽したとどまつの凍害と生育の調査は、昭和16年の秋まで相當綿密にまた連続して行い、そののちは昭和18年と昭和26年に行つた。つぎの表は凍害の経過と生育の状態を總括的にあらわしているもので、凍害はあつても一應生育の見込みがあるもの(○)、見込みがないもの(●)、枯死したもの(×)に區別している。比較的溫暖なところでは、生育の見込みがないようにみえても、後に立直るものが相當ある。まただいたい植栽後2~3年で生育の傾向はきまるものようであつた。(表28)

10. 植栽したとどまつの凍害

軸頭の芽の凍害 昭和14年5月11日、10箇所に10本づつ計100本のとどまつを植えた翌日は都合よく小雨、しかし雨があがつた13日から18日にかけて霜日がつづき、あだかも綻びかけていた無傷の苗は凍害にさらされ、14、16、17、18日の低気温のため被害をうける結果になつた。つぎの表は軸頭の頂芽と側芽について、發芽伸長したものと、すでに凍死して發芽しなかつたか、又は發芽してから凍死した芽の數を、植栽地ごとに示したものである。

表29 軸頭の芽の凍害 昭和14年春

植栽地	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
頂芽	發芽數	5	6	10	9	5	10	10	9	6
	凍死數	5	4	0	1	5	0	0	1	4
	凍死(%)	50.0	40.0	0	10.0	50.0	0	0	10.0	40.0
	計	10	10	10	10	10	10	10	10	10
側芽	發芽數	17	11	16	17	7	14	18	10	8
	凍死數	26	31	30	23	37	27	22	34	35
	凍死(%)	60.5	73.8	65.2	57.5	84.1	65.9	53.8	77.3	81.4
	計	43	42	46	40	44	41	39	40	44

c, d, f, g, h, iでは、頂芽の凍死がなかつたか又はあつても僅かであつた。そのうちd, g, h, iは比較的あたたかい所である。反對に、寒冷なb, jでは40%凍死した。側芽はどこでも過半数が凍死し、寒冷なところでは70%をこえている。このように、それぞれの植栽地の、凍害に関する特徴は最初の年からあらわれていたが、年とともにいよいよはつきりした。

著しい凍害をうけた苗は、この年の夏から秋にかけて次第に成育不良の徴候をあらわれ、a, d, eにおいては枯死するものを出すにいたつた。しかし間もなく絶望状態になつたb, f, jには、まだ凍死するほどの被害がなかつた。凍害はあつても、全体としての生育状

態は i が最も良く、g はこれに次いでいた。

昭和 15 年 5 月 9 日、前年の植栽地に 10 本ずつ、軸梢に凍害がみとめられない 5 年生苗を追加したから、10 箇所それぞれ 20 本ずつ合計 200 本のとどまつを植えたことになった。これらは前年とおなじ注意をもつて、おなじように植えてついている。

當時周囲の造林したとどまつの芽は、温暖な場所で大きく膨んでいた。植栽苗の芽は、前年の分もすべてまだ固かつたが間もなくゆるみ、5 月 26 日まで繰返してあらわれた霜日に凍害をうけ、ことに 15, 20, 24, 26 日の低気温のためなやまされた。(表 30)

表 30 軸頭の芽の凍害 昭和 15 年春

植 栽 地	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	
頂芽	發芽數	11	0	11	11	6	3	17	13	17	5
	凍死數	8	18	9	8	12	17	3	7	3	11
	凍死 (%)	42.1	100.0	45.0	42.1	66.7	85.0	15.0	35.0	15.0	68.8
	計	19	18	20	19	18	20	20	20	20	16
側芽	發芽數	23	4	28	40	9	19	73	19	46	13
	凍死數	43	66	56	39	59	65	13	65	34	60
	凍死 (%)	65.2	93.3	66.7	49.4	86.8	77.4	15.1	77.4	42.5	82.2
	計	66	70	84	79	68	84	86	84	80	73

寒冷な b では、頂芽の 100% と側芽の 93% をうしない、f においてもまた頂芽の 85% と側芽の 77% をうしなつている。このような状態では、もはや正常な生育を望むことが困難である。これに反し、比較的温暖な g では、頂芽も側芽も 15%、i では頂芽の 15% と側芽の 43% の凍死で危険をのがれている。

この第 2 年目には、あたらしく植えた苗が半分をしめているにもかかわらず、全体として見るとき、寒冷な植栽地の凍害がいちじるしく、温暖な植栽地の凍害は緩和される傾向があらわれている。一面においてそれは、前年うえた苗木に、第 2 年目から、植栽地の低温の影響がはつきりあらわれたことを意味する。この秋までに、前年植栽の分に合計 13 本、新植の分に 4 本の立枯を生じた。その原因は凍害による衰弱である。

昭和 16 年の春は夜の気温がひくく、凍害のおそれある 5 月 10 日から 6 月 16 日までに 18 日も霜日があり、ことにとどまつ 苗の芽がふくらみ始めた 5 月中旬の最低気温は、b において -11.2° (13 日) と -10.9° (16 日) に達したほど厳しかつた。苗木は植栽後 3 年目と 2 年目であつたから、前年の被害はさらに加重され、凍害の容態は、もはやいたる所で非常にあきらかになつた。(表 31)

表 31 軸頭の芽の凍害

昭和16年春

植栽地	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	
頂芽	發芽數	6	0	2	8	3	3	15	14	13	3
	凍死數	8	3	13	9	6	5	5	4	7	9
	凍死(%)	57.1	100	86.7	53.0	66.7	62.5	25.0	22.2	35.0	75.0
	計	14	3	15	17	9	8	20	18	20	12
側芽	發芽數	27	0	9	15	6	10	42	25	32	1
	凍死數	18	8	31	30	20	17	8	28	23	41
	凍死(%)	40.0	100	77.5	66.7	76.9	63.0	16.0	52.8	41.8	97.6
	計	45	8	40	45	26	27	50	53	55	42
軸梢の凍死	5	9	5	1	9	9	0	2	0	5	
枯損(凍死)	1	8	0	2	2	3	0	0	0	3	
3箇年平均											
頂芽の凍死(%)	49.7	80.0	43.9	35.0	61.1	49.1	13.3	19.1	20.0	61.3	
側芽の凍死(%)	55.2	89.0	69.8	57.9	82.6	68.8	23.3	61.7	53.9	87.1	

頂芽と側芽の凍死の百分率は、全体として前年よりいくらか多くなっているのだが、jでは特に目立って多くなり、bと共に最も激しい凍害地であることを示すようになった。一方、hの凍死率は前年より目立って少くなり、g、iと共に比較的凍害が緩和されていることを示すにいたつたが、これらの状態は周囲のとどまつ造林地の状態とよく一致している。

この年はまた、軸頭の頂芽と側芽の凍死ばかりでなく、軸梢そのものの凍死があらわれており、表のとおり、寒冷なb、e、fではそれぞれ9本づつある。このような苗は枯損の一步前にほかならない。表の頂芽と側芽の数は、この凍死した軸梢を除いて数えている。それにしても側芽の数がすくないのは、凍害のため衰弱していることを示している。かくして秋までに、合計31本の枯損苗を生ずるにいたつた。

枝の先端の芽の凍害 凍害をうけるのは、軸梢の芽ばかりでなく、枝の先端の芽もまたおなじことである。軸梢の芽よりも、枝の先端の芽の方がはるかに数が多いから、凍害地では、この枝の先端の芽の凍害が非常にたくさんある。

昭和15年6月10日、それぞれの植栽地について、この状況をしらべてみた。これらの植栽地には、前に述べたとおり、前年の5月11日にうえたそれぞれ10本と、調査の1箇月前、5月9日にうえた10本と、あわせて20本の無傷のとどまつがあるはずであつたが、前年にうえた分は、所によりすでに凍害にもとづく枯損さえ生じていた。

調査した枝は、前年軸梢に形成された枝、すなわち軸梢の最上位におよそ3~4本づつ輪生している枝に限った。14年にうえた分は、その春のうちに凍害にかかり、不定芽がこの最上位の枝を形成しているものもあつた。

これらの枝の先端には1個の頂芽と、これを左右からはさむ2個の側芽があり、あわせて3個づつ芽をもっている。極めて少数の枝は、3個の芽のうちどれかが始めから缺けていたにちがいないが、早春に凍死したものととの區別が明らかでなかつたから、便宜上、これらも凍死したもののなかに数えた。この結果を表32にまとめる。

表32 枝の先端の芽の凍害

植栽苗所	凍死	發芽	芽の總數	枝の數	苗本數	凍死%	發芽%	備 考
a	66	84	150	50	19	44	56	枯損1本
b	105	9	114	38	14	92	8	" 2本
c	101	34	135	45	18	75	25	
d	75	63	138	46	16	54	46	" 1本
e	98	31	129	43	15	76	24	" 2本
f	104	46	150	50	20	69	31	
g	28	155	183	61	20	15	85	
h	97	92	189	63	20	51	49	
i	37	53	90	30	10	41	59	他の10本缺測
j	97	41	138	46	17	70	30	枯損2本

あたたく被害がきわだつてすくないgの15%を除けば、a, iのように、比較的被害が軽いところでも40%以上が凍死し、被害が甚だしいc, e, f, jでは70%以上、最も甚だしいbでは90%以上の凍死である。これをもつても、枝の先端の芽の凍死が、凍害地ではいかに多いかがわかるであろう。苗本數は枯損と枝のないものを除いて数えた。

表33はまた、おなじ資料を別にまとめ、枝の先端の芽の凍害状態を検討したもので、すべての芽が凍死した苗の數、反對に、凍死した芽は一つもなく、すべてが發芽した苗の數、一部の芽は凍死をまぬがれているが、全体の2/3以上が凍死した苗の數をあげている。

このように、比較的あたたかいh, iでは、枝の芽が全部凍死してしまつた苗は1本もなく、gではまた20本のうち1本にすぎないが、最も寒冷なbでは、14本のうち10本まで、すべての芽が凍死している。百分率をみると、全体の傾向が一層よくわかつてくる。最初の欄と次の欄をあわせれば、bの100%を最大とし、c, e, jはいずれも70%以上で被害の大きいことをしめし、反對にgの5%とiの10%は被害がいたつて軽いことをしめしている。

表 33 本数別枝の先端の芽の凍害

植栽箇所	全部凍死	$\frac{2}{3}$ 以上凍死	全部發芽	その他	苗本数	備 考
a	3	4	1	11	19	
b	10	4	0	0	14	
c	6	7	1	4	18	
d	2	4	2	8	16	
e	2	11	0	2	15	
f	8	5	0	7	20	
g	1	0	9	10	20	
h	0	7	1	12	20	
i	0	1	1	8	10	他の10本缺測
j	7	5	2	3	17	

同 上 %

a	16	21	5	58	100	
b	71	29	0	0	100	
c	33	39	6	22	100	
d	13	25	13	49	100	
e	13	74	0	13	100	
f	40	25	0	35	100	
g	5	0	45	50	100	
h	0	35	5	60	100	
i	0	10	10	80	100	
j	41	29	12	18	100	

表 34 枝の頂芽と側芽の凍死の比較

植栽箇所	頂 芽			側 芽			備 考
	凍死	總數	凍死の%	凍死	總數	凍死の%	
a	19	50	38	47	100	47	
b	37	38	97	68	76	89	
c	36	45	80	65	90	72	
d	25	46	54	50	92	54	
e	33	43	77	65	86	76	
f	38	50	76	66	100	66	
g	6	61	10	22	122	18	
h	34	63	54	63	126	50	
i	11	30	37	26	60	43	20本のうち10本缺測
j	34	46	74	63	92	68	

表 34 はまた、枝の頂芽と側芽の凍死の関係をしらべたものである。百分率をみると、それぞれの植栽地によつて、それは可なりちがうが、おなじ箇所の頂芽と側芽の凍死率は可なり似ている。百分率の平均を計算しても、頂芽 60%、側芽 58% となるのである。しかしよく見れば、比較的わずかな兩者の差に、或る傾向があらわれている。それは a, g, i のように温暖なところでは側芽の凍死が多く、また b, j のように著しく寒冷なところでは頂芽の凍死が多く、したがつて被害も悪質であることである。ただし側芽の数は頂芽の 2 倍であるから、絶対数では側芽の凍死が常に多くなつている。

上長生長 凍害をうけた苗木は、被害の程度によつて、形がいちじるしく不整になるため、上長生長の測定に無理がとれないやすいが、まだそれほど不整になつていない昭和 14 年と 16 年に測つた結果を一應まとめてみる。

測定の方法は、測定のとくすでに枯死している苗木を先ず除いた。頂芽が發芽伸長したものは問題がないが、頂芽を失つたものについては、頂芽に替る軸頭の不定芽、優勢な側芽、複梢であればその最も優勢なもの等を適當にえらんで測り、場合によつては上長生長を 0 とした。平均はそれらの合計を、現存本数で除したものである。また最大生長は、頂芽が發芽して伸長した長さで、側芽や不定芽からは求めなかつた。

表 35 上長生長 (cm)

植栽地	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
昭和 14 年 秋										
平均	2.6	3.7	7.1	3.0	3.7	7.2	5.3	7.1	5.6	3.5
最大	7.3	9.1	10.7	5.1	8.7	10.4	10.3	11.3	9.4	6.4
本数	9	10	10	9	8	10	10	10	10	10
枯損 (凍死)	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0
昭和 16 年 秋										
平均	2.2	1.1	4.1	1.3	3.0	1.1	3.3	6.6	6.2	3.1
最大	7.7	·	6.8	4.3	0.9	1.6	10.0	12.9	14.7	2.8
本数	19	9	20	18	15	12	20	20	20	16
枯損 (凍死)	1	11	0	2	5	8	0	0	0	4

表のとおり、平均生長と最大生長をあわせて考えれば、だいたいの傾向として、g, h, i のように温暖で凍害が緩和されている場所の生長がよく、b, j のように寒冷な場所はその反対になつている。16 年の平均生長は、全体として前年よりも減少し、ことに寒冷な b, f における激減は、凍害の激しさを思わせるに充分である。e の平均生長が 3.0 cm で最大生長が 0.9 cm であるのは、前記のとおり頂芽の生長を測つているためで、b の最大生長が

ないのも同じ理由である。このbをはじめとしてcやjの平均生長は、主として側芽や不定芽から求めており、ほとんど頂芽の生長からこれを求めたgやiにくらべると、b, e, jの樹形はいちじるしく不整である。また16年のb, jの平均生長が1.1cmにすぎないことは現在ほとんど生長がなく、植栽後2~3年で、将来の見込みも最早やなくなつたということの意味している。

11. 發芽の遲滯

發芽季の凍害地のとどまつは、一齊に發芽せず、また一齊に發芽をおわらない。ことに發芽の終りは不整いで、夏になつても、まだ育ちおくれの新葉がぼつぼつ萌えていることがある。發芽は日中あたたかい丘の中腹などからはじまり、寒い箇所はいくらか遅れる傾きがあるが、いずれにせよ、冬芽のうちに凍死した芽があつたり、一旦開くことは開いてもやはり凍死した芽があつたりすると、あたらしい不定芽が形成され、二次的の發芽が夏まで続くことがおこるのである。それらの多くは、肉がうすく形も小さい弱々しい葉をひらくのが常で、秋には早霜と晩秋の凍害をうけやすい。頂芽を失つた軸頭に、頂芽となる優勢な不定芽を發生することは概してすくなく、それよりも不定芽がむらがつて生じ、遂に主軸が形成されないことがおこる。

昭和16年の春から夏にかけて、各植栽地の苗木につき發芽日を記録した結果は、以上の發芽遲滯の關係をよくしめしていた。それは各地區のすべての苗木につき、軸梢先端の頂芽と側芽の發芽日を記録したもので、側芽は數個のうちどれかが最初に發芽した日を記録している。5月中旬から9月の初めまで隔日に植栽地を巡回し、芽鱗がひらき、新葉がすこしでも露出した日を發芽日とした。調査本數は、c, g, h, iだけが植えつけた時とおなじ20本づつで、他は凍死したものがあつて減つており、ことにbの生存苗は少なくなつていた。

表36はこの記録を更にまとめたもので、或る植栽地の發芽の始まりは、その植栽地の苗木のうちどれかが最初に發芽した日、發芽の終りは、どれかが最後に發芽した日、平均發芽日は、それぞれの苗の發芽日を平均したもの、發芽期間は、發芽の始まりから終りまでの日數で、最初の日も數えている。

また表37はおなじ記録から、季節別に發芽した苗木の本數をかぞえてまとめたものである。不發芽の欄には遂に發芽しなかつた本數をあげ、計は各植栽地の調査本數、すなわち現存本數であるが、若干の瀕死木は除いた。

このように、昭和16年の發芽は、5月17日、丘の中腹にあつて最もあたたかいgの側芽がひらいたのに始まり、いくらか寒冷なcの頂芽がひらいた7月16日にいたる2箇月におよんでいて、地區によりそれぞれ特徴があらわれている。一般に、發芽が長びくとこ

表 36 頂芽と側芽の発芽日とその期間

植栽地	側 芽				頂 芽			
	発芽の始	発芽の終	平均 発芽日	発芽期間	発芽の始	発芽の終	平均 発芽日	発芽期間
a	V/23	VI/4	VI/4	43	V/27	VI/4	VI/11	39
b	VI/2	VI/4	VI/29	33	VI/2	VI/22	VI/12	21
c	V/27	VI/4	VI/7	39	V/29	VI/16	VI/16	49
d	V/23	VI/4	VI/4	43	VI/2	VI/4	VI/8	33
e	V/25	VI/4	VI/4	41	V/29	VI/4	VI/20	37
f	V/23	VI/4	VI/11	43	VI/6	VI/8	VI/23	33
g	V/17	V/29	V/24	13	V/31	VI/20	VI/5	21
h	V/21	VI/4	VI/8	45	V/23	VI/2	VI/7	41
i	V/21	VI/4	V/27	45	V/25	VI/12	VI/4	19
j	V/23	VI/4	VI/7	43	V/31	VI/10	VI/13	41

表 37 季節別発芽苗数

植栽地	側 芽						頂 芽					
	5月	6月 上半	6月 下半	7月	不発芽	計	5月	6月 上半	6月 下半	7月	不発芽	計
a	10	4	3	1	0	18	2	13	0	3	0	18
b	0	1	0	6	0	7	0	2	2	0	3	7
c	6	10	2	2	0	20	2	10	2	5	1	20
d	8	7	0	2	0	17	2	12	0	1	2	17
e	5	5	1	1	2	14	2	1	1	4	6	14
f	2	9	2	2	0	15	0	5	4	5	1	15
g	20	0	0	0	0	20	1	17	1	0	1	20
h	9	4	2	5	0	20	3	14	2	1	0	20
i	17	1	1	1	0	20	7	13	0	0	0	20
j	6	8	0	3	0	17	1	12	0	3	1	17

ろほど凍害はいちじるしい。

gにつづき、5月21日には、これも比較的あたたかい林縁のhとiの側芽がひらきはじめている。しかし最も寒冷なbの側芽がひらいたのは6月2日からで、これはgよりも16日遅れたことになる。

この側芽の発芽の終りは、あたたかいgでまた最も早く切上り、最初の発芽ののち13日目の5月29日には、すべての苗の側芽のどれかが発芽してしまつた。凍害が非常にすくないこの植栽地は特別なところで、他のすべての植栽地の側芽の発芽の終りは7月4日で、大体40日あまりかかっている。これは凍害がある證據で、7月にさえなつている遅い発芽はもとより、6月も下旬の発芽は、定芽が凍死したのちの不定芽であると考えても差支えなく、それらの生育は思わしくないのが常である。それゆえbのように発芽のはじま

りが遅れること、また發芽が長びきすぎることは、凍害が起つているという悪い知らせである。

發芽日の平均は、gの5月24日が最もはやく、bの6月29日が最もおくれている。gのように、あたたかく凍害のすくないところでは、早くはじまつた發芽がまた早く終り、發芽日の平均もはやくなる。これに反し、寒冷で凍害の特に多いところでは、ほとんどすべてが不定芽の二次的發芽であるから、發芽の開始も終止も遅れ、平均發芽日も遅れる。gについてあたたかいiの發芽日は5月27日で、これも早い。つぎはa, d, e地區の6月4日であるから、側芽の平均發芽日の順位はだいたい凍害の順位をしめし、その早いところの被害は軽く、遅いところの被害はいちじるしいと言つてよい。

頂芽の發芽が側芽よりおくれる傾向は、表36、表37のどちらにもよくあらわれている。被害甚大のものを除けば、それぞれの地區において頂芽の發芽は側芽よりも數日または10日以上もおくれている¹⁾。また表37のように、5月の發芽は側芽がおおく、6月上半期の發芽は頂芽がおおい。

最初の頂芽の發芽は、比較的あたたかい林縁h地區の5月23日で、ここでは側芽がひらいたのち2日で頂芽もひらきはじめてののだが、これはあまりよい傾向ではない。望ましいのは、凍害のおそれが去つたころ一齊に發芽することである。そのよい例はあたたかいg地區で、ここで頂芽がはじめて開いたのは5月31日であつたから、はじめて側芽がひらいた5月17日ののち2週間目にあたり、最後にひらいた6月20日まで、頂芽の發芽期間は21日であつた。尤もこの最後の分は、不幸にも多少被害をうけた軸梢であつたから、もしこれを除けば、gの頂芽の發芽は一應6月8日に終つているのであつて、その發芽期間は、わずかに9日にすぎないことになるのである。これにくらべてiの頂芽の發芽期間19日は、少々長びいてはいるが、それでも他の地區より可なり短く、林縁のあたたかい恵まれた環境でほとんど順調に發芽したのである。これに反し、頂芽の發芽が6月のなかばすぎから7月までも長びくことは、側芽の場合とおなじように、凍害があるときの悪い傾向で、頂芽の育ちおくれもまた、生育は思わしくないものである。

頂芽の平均發芽日は、iとgの6月4日と5日からfの6月23日にいたり、fのほかc, j, bのように、遅れるところほどだいたい凍害はいちじるしい。

12. 植栽試験の結果

結果は直ちにあらわれ、ほとんどおなじ苗であつたにもかかわらず、或るものは植栽の年の夏または秋までに凍害のため枯死し、或るものはまた凍害のため生育の状態に異状

1) このように頂芽の發芽期がおくれることは、致命的な凍害の機会をすくなくする。このことは既に注意されている。

を呈した。周囲のとどまつ造林地の凍害がいちじるしく、残存木もすくない所では、植えた苗木もまたいちじるしい凍害をうけて年々消失し、周囲が比較的凍害をまぬがれている所では、植えた苗木にも凍害がすくない等、それぞれの植栽地の凍害の状況は、周囲の林分の状況と非常に似ている結果をえた。

つぎの表は、昭和14年と15年の植栽以来、現在(昭和26年春)なお生育している本数と、凍害のため枯死してしまつた本数で、参考のため周囲の林分の凍害状況を記入した。

現存本数のなかには、現在生存しているだけで、近い将来に枯れるか、また枯れなくとも健全な生育は望めないものを含んでいる。

表 38 植栽地の現在本数

昭和26年春

植栽地	植栽本数	現在本数	凍死本数	周囲の林分の状況
a	20	18	2	凍害は微害の程度、生長は多少おとり、若干の枯損
b	20	3	17	凍害甚だしく、残存木はほとんどない
c	20	6	14	中害地、枯損は相當あり、生長は大小不同の傾きがある
d	20	16	4	微害地、生長はよいが多少枯損がある
e	20	12	8	中害地、但し状況はcよりもわるい
f	20	0	20	凍害甚だしく、残存木はない
g	20	20	0	生長良好でまたよくそろつている、枯損はまれである、しかし無害ではない
h	20	5	15	生長はよいが不同があり、また割合に枯損がある
i	20	17	3	生長良好でまたよくそろつている、枯損もまれで局部的にはgにまさる
j	20	1	19	凍害甚だしく、残存木はほとんどない

このように、寒冷で凍害がいちじるしいb, f, jに植えた苗木はほとんど凍死し、生存するものも健全な生育の見込みはまつたかない。これに反し比較的温暖なa, d, g, iでは凍死したものがすくなく、ことにgでは1本も凍死していない。

とどまつは植栽後の11~12年間を、それぞれちがつた低気温のなかに生育して現在にいたつた。その最も見やすい特徴を、上記の現存本数と高さの生長に見出すことができるのであつて、つぎの表は、現存木について計算した平均樹高と、現存木中の最大樹高をあげ、参考のため平均根元直径と最大根元直径を記入した。大体の傾向として、樹高が低く直径が太いことは凍害のいちじるしい證據で、また高く太いことは凍害が比較的すくなかつたことを示している。また現存木の生育状態には良いものと悪いものがあり、その間に多くの段階もあるが、可と不可に大別してそれぞれ数を記入した。多少とも凍害をうけないものはない位だが、過去に被害はあつても現状から将来の見込みがあるものは可とし、見込みがないものは不可とし、可か不可か判断に苦しむものも一應可とした。植えたときの苗間距離は30cm内外でそのままになつているから、箇所によつては枝張りが不自然になつている。昭和19年以後に發生してきた灌木のため、局部が庇壓されたところもあつ

たが、hの一部を例外とすれば、将来の生育の望みがあるかないかは、ほとんど全く凍害の程度に支配されている現状である。

表 39 現在の生長状態

昭和 26 年春

植栽箇所	平均樹高 (m)	最大樹高 (m)	平均 根元直徑 (m)	最大 根元直徑 (m)	現存本数	生育可	生育不可
a	0.73	1.13	0.018	0.023	18	18	0
b	0.58	0.67	0.020	0.027	3	0	3
c	0.61	0.94	0.019	0.023	6	3	3
d	0.71	0.93	0.019	0.026	16	13	3
e	0.64	1.09	0.019	0.024	12	8	4
f	0	0	0
g	1.88	2.65	0.022	0.034	20	19	1
h	1.03	1.61	0.020	0.028	5	5	0
i	0.90	1.53	0.017	0.025	17	17	0
j	0.42	0.42	0.010	0.010	1	0	1

寒冷で凍害が著しい箇所は、凍死したものが多いために現存本数がすくないばかりでなく、現存するといつても、ただ生きているだけのものがすくない。特に寒冷な b, f, j はそのよい例で、f は全部凍死してしまつたし、j にはただ 1 本残つているだけで勿論将来の見込みはなく、b の 3 本の現存木にも将来の見込みはもろくない。また樹高は、植えてから 10 年以上たつているのに、j に残るただ 1 本はわずか 0.42 m で、b の 3 本も平均 0.58 m にすぎない。反対に、丘の中腹の温暖な g では、凍死したものが 1 本もなく、樹高の平均 1.88 m、最大は 2.65 m に達している。樹高は劣るけれども、温暖な林縁の i もこれと似ている。樹高の平均が大きい温暖な林縁の h の現存本数がすくないのは、隣接して発生した灌木の庇蔭が主な原因であつた。

試験に植えたとどまつの形態 凍害の程度はちがうけれども、凍死をまぬがれて現に残つているとどまつの形態は、凍害木特有の形態になつているものが多く、また今は正常な形態だが、よくみると凍害の痕跡をとどめているものも相當ある。

その最も典型的な形態は、二叉、三叉またはそれ以上にわかれていた複梢で、またたびたび軸頭が凍害を受けたため、軸梢の交替もくりかえされていた。これには同じ軸梢の枝が立ちあがり軸となつているものもあるし、また同じ軸梢の不定芽から新しい軸を形成しているものもある。しばしばまた、二叉、三叉などのうちの或る主軸が凍死して他の軸がこれに替つているものもある。いずれにせよ、軸頭の凍死は高さの生長をさまたげ、高さの割に直徑が太い。そのほか針葉の脱落、下枝の枯れあがり、小枝の密生、その反対に小枝の疎生なども、凍害の結果としてあらわれていた。どの植栽箇所にも、このような

とどまつが意外なほど多く、ある箇所では現存木のすべてがそれであつた。

10 箇所の植栽地のなかから、代表的な例をあげる。現存木の形態のあらましのほか、高さくらべるため根元直径を記入した。枝張りは凍害のほかに、せますぎる苗間距離の影響を大きくうけているから省略、不可は生育の望みがないもの、その数は前の表にでてゐる。激害をうけたbに現存している3本と、jに現存する1本はつぎのとおりである。

表 40 激害をうけた形態

植栽地	苗番號	樹高 (m)	根元直径 (m)	形 態
b	2	0.46	0.018	三又, 軸梢は繰返し交替, 不可
"	5	0.67	0.016	四又, " "
"	6	0.61	0.027	" " "
j	15	0.42	0.010	五又, " "

三又または四又などのそれぞれの軸は、さらに不規則に分岐しているから箒を立てたような形になり、とどまつ固有の形は全く失われている。(圖2)

以上の箇所ほどではないが、なお可なり激しい凍害をうけたcの6本、eの12本の現存木はつぎのとおりである。

表 41 中害をうけた形態

植栽箇所	苗番號	樹高 (m)	根元直径 (m)	形 態
c	1	0.46	0.015	針葉脱落, ほとんど枯れている, 不可
"	5	0.62	0.023	下枝枯死, 軸梢繰返し交替
"	6	0.56	0.022	小枝異様に密生, 軸梢繰返し交替
"	16	0.50	0.016	軸梢枯死, 樹勢衰弱, 不可
"	17	0.58	0.016	脱葉多く, 下枝はすでに枯死, 不可
"	20	0.94	0.024	比較的よく伸びているが, 枝が極端にすくない
e	4	0.88	0.022	下位に三又の部分, 軸梢は繰返し交替
"	6	0.30	0.020	典型的な複梢, 枯れかけている, 不可
"	9	0.70	0.020	下位に二又の部分, 軸梢は繰返し交替
"	10	0.70	0.024	脱葉, 中位より三又となる, 軸梢は繰返し交替, 枯れかけている, 不可
"	11	1.09	0.018	異状がない
"	12	0.71	0.014	脱葉, 軸梢不明, 不可
"	13	0.53	0.012	軸梢不明
"	14	0.72	0.020	梢頭凍死
"	15	0.73	0.020	軸梢が交替
"	16	0.66	0.019	梢頭凍死
"	17	0.47	0.019	"
"	18	0.35	0.015	典型的な複梢, 不可

eの4は根元附近が三叉になつていて、その一つが優勢で主軸になつている。eの10は根元から30~40 cm上から複梢になつているのである。

最も安全にそだち、現在どこよりも蕊が立つてよく伸びているgにおいてさえ、全体の1/3にある7本の幹に凍害の痕をみる。ただし現存木20本で凍死したものはなく、不可はただ1本である。つぎのような凍害はあつても本質的には無害にちかい。

表 42 無害にちかい形態

植栽箇所	苗番號	樹高 (m)	根元直徑 (m)	形 態
g	1	0.88	0.022	下位に三叉の部分, 上位で軸梢交替
"	2	2.65	0.025	異状がない
"	3	1.50	0.028	下位に大きい二叉の部分
"	4	1.88	0.028	異状がない
"	5	2.00	0.026	下位に大きい二叉の部分
"	6	2.12	0.025	中位に二叉の部分
"	7	2.38	0.031	異状がない
"	8	1.91	0.025	"
"	9	1.61	0.021	"
"	10	2.06	0.026	"
"	11	1.87	0.034	下位に二叉の部分, 軸梢交替
"	12	0.92	0.018	異状がない
"	13	1.87	0.028	中位に覆梢の部分
"	14	1.00	0.016	異状がない
"	15	1.34	0.018	"
"	16	1.04	0.015	"
"	17	1.38	0.024	"
"	18	0.90	0.012	"
"	19	0.90	0.013	"
"	20	0.51	0.013	三叉, 主軸不明, 不可

結 言

この研究は、造林地におけるとどまつの凍害の實態を、北海道大學苫小牧演習林の典型的な凍害地について研究したものである。とどまつは養苗中にも凍害をうけやすいが、造林地においてもまた、凍害地の条件をもつところでは凍害をうけやすい。問題の凍害造林地は、斜面の裾にあるひろい凹地で、昭和2年に植えたとどまつが、造林後12年の昭和14年の状態で、激害地ではすでにほとんど全滅し、ほとんど被害のないところでは、4 mまたは5 m以上まで生長していた。

凍害はさまざまな生長障害を及ぼし、また凍害の程度によつて障害の程度も異なるから、

この凍害地のとどまつの生長状態は、場所によつて相當ちがつていた。その場所によるちがいは、地盤の高さと密接な關係があつて、地盤の高さをませば、比較的溫暖になるため低氣温の有害作用を減じ、凍害は緩和されて生長もよくなつてゐる。したがつて最も寒冷な凹地の底は最も凍害がいちじるしく、生長もまた最もわるいばかりでなく枯損を多くだしている。しかし丘の高みでは、ほとんど凍害がなく正常な生育をとげており、凹所の底と丘の高みの間に、次第に移つてゐる凍害の段階が存在した。

生長の場所によるちがいはまた、地盤の高さの他に、造林地の東側に隣接する林高14mのとうせんからまつ林と、ならの造林地が雑木林化した森林の影響があつた。ことにからまつ林の影響はいちじるしく、その林縁における凍害の緩和作用のため、激害地の條件をそなえている場所にさえ、際立つてよい生長があり、ことに、林縁でしかも地盤が高いところには、この凍害地の全体を通じて最もよい生長をとげたとどまつがあらわれた。

植栽後7~12年を経過した昭和14年の調査では、激害地に残存した10本のとどまつの平均樹高0.7m、最小のものは僅か0.3mにすぎなかつた。これらはすべて著しい凍害をうけて極端な複梢となり矮生しているのであつて、一年の上長生長の平均は0.04m、これではほとんど生長がないにひとしく、昭和26年の調査のときは、これらも全部枯死していた。これに反し、比較的溫暖で凍害がいちじるしく緩和されている丘の中腹では、57本の平均樹高1.7m、最大のもは3.2mになつてゐた。またからまつの林縁の、最も生長がよい部分15本の平均樹高は3.3m、最大は5.4mであつた。昭和26年の調査によると、前記の丘の中腹12本の平均樹高5.1m、最大は6.7m、また前記の林縁における12本の平均樹高6.4m、最大11.6mに生長していた。このように、寒冷な激害地のとどまつは絶滅し、比較的溫暖な場所では、幼齡時代の凍害の痕跡をのこしてゐるとしても、今日安全に生長をつづけつつあり、この二つの間に、次第に移つてゐる生長の段階と被害の段階が、依然としてみとめられるのである。

凍害の實態をたしかめるため、造林地の現状調査のほか、造林地内の10箇所に20本づつ、凍害のないとどまつ苗をうえ、最低氣温の観測と併行して軸頭の凍害を観察した結果は、3箇年の平均で頂芽の凍死13~80%、側芽の凍死28~89%であつて、とどまつの凍害として最も重要な、しかも激害地ではしばしば致命的なこの梢頭の頂芽の凍死は、比較溫暖で凍害が緩和されているところでは明らかにすくなく(13~20%)、激害地ではまた明らかに多い(61~80%)。側芽の凍死はこれほど際立つたちがいはないが、比較的溫暖地で50%内外、激害地ではどこも80%をこえた。側芽は頂芽より發芽季が早い傾向があるため、總体的にみたその凍死は意外に多い。

梢頭の芽ばかりでなく、比較的重要なではないが枝の先端の芽もまた凍死している。こ

の調査は1回かぎりであつたが、前記のとどまつ苗の、軸梢の最上位に輪生している数條の枝の先端にある芽の凍死は、比較的溫暖な場所の15%から、激害地の92%の間であり、平均は59%、すなわち半分以上が凍死している。一例によると、中害地域の造林木から採集した4年生全長約30cmの軸梢に、合計65箇の凍死した芽が附着していた。このような状態で、凍害地のとどまつの樹形が、凍害木固有の不整な形になるのはあたりまえである。

10箇所の植栽地は、戦争末期以来放置し、植栽後11年及び12年の昭和26年、試験に植えたとどまつの生育を調査した。凹地の底の激害地では、20本の大部分が枯損し(17~20本)、最も溫暖な丘の中腹ではそのまま全部生存した。また生存していても、激害地では生育が非常にわるく、平均樹高は0.6m前後またはそれ以下、被害がすくなく特に生長がよかつた丘の中腹は平均1.9mで最高のもは2.7mに達していた。この状態は、植栽ののち7~12年の問題のとどまつ造林地を、昭和14年に調査したときの状態とほとんど一致していて、當時激害地の平均樹高は同じく0.7m、丘の中腹は1.7mであつた。

凍害をうけたとどまつは、固有の痕跡が残されていて、外観からたやすく判定することができる。主な痕跡は、発芽の直前または直後に凍死した芽が多くあること、複梢が形成されていること、軸梢の枝付または小枝の分岐が不整になつていること、不定芽の発生が目立つて多いこと、上長生長が損われていること等である。激害地では、これらの痕跡が年と共にいちじるしくなる。あたらしい造林地では、最初にあげた芽の凍死を、特に注意する必要がある、新緑季の凍死直後の、判定のたやすい時に観察すると都合がよい。

凍害地の判断に最もものぞましいことは、発芽季の最低気温を現地で測ることで、とどまつの場合、 -4° 内外の低気温があらわれていれば、凍害の危険があると思わなければならず、発芽季にもかかわらず、もし -10° くらいまでも、しばしば降るようであれば、そのまま造林してもとどまつは生育しないであろう。たとえ附近に気象観測所があつても、一應は現地ではかることが是非必要であり、現地の状況次第で場所によるちがいが大きいから、ただ1箇所ではかつても不十分なことがある。この場合は、適当な数箇所で同時にはかることが望ましい。このとき、観測の地上高に注意し、必要な高さではからなければならず、新植の場合は、地上0.25m位が適當であろう。

本稿は凍害の實態をあきらかにすることを努めたため、その豫防法については直接ふれなかつた。しかしこの研究から、つぎのことは言うことができる。

1. とどまつは、造林地でも凍害にかかりやすい樹種であるから、その恐れがある所では、たとえばからまつ、あかえぞまつのような耐寒性樹種をえらぶとよい。

2. 地形に注意し、丘つづきの低凹地では、比較的溫暖な丘の斜面にとどまつを植え、寒冷な低凹地には、耐寒性の樹種を植えるとよい。本稿でとりあげた激害地は、昭和

16年やちだもに植えかえて一應成功している。ただし、丘の上がひろい高臺になつていれは、寒冷な部分があるかも知れない。

3. 凍害の恐れあるところでは、ひろい皆伐面をつくることを避けた方がよい。

4. 保護林として、前生樹の保残は有利と考えられるが、凍害豫防のためには、相当多く残さなければならず、できうれば、列状に残すことも考えるとよい。

5. 林縁の保護作用を利用することも有利である。ただし林縁の有効距離は、林分の高さくらいであるから、大規模には、幾條も帯状に伐採することが考えられる。凍害にたいしては、朝日をさえぎる西側林縁が特に有利である。

6. したがつて、寒冷な地方では、人工造林よりも天然更新の方が、無理がなくて自然であろう。

7. 耐寒性で生長がはやい、たとえばからまつととどまつの列植も實行するとよい。苫小牧演習林では、これによつて特に成績がよいところがある。

8. 條刈の方向も吟味するとよい。

これらの具体的な方法はなお検討する必要があり、若干の試験も實施したが、これらについては稿をあらためたい。

Résumé

The late frost injury of a Todomatsu (*Abies Mayriana*) plantation was closely investigated and coordinated with low temperature measurements.

On account of the good quality of the timber and the rapidity of growth, Todomatsu is planted extensively in Hokkaido, Japan. But damage from frost occurs quite frequently. The effects are sometimes fatal, and if not fatal, they tend to reduce the vigor and quality of the tree. Damage begins in early May, a low temperature from -4°C may suffice to do the damage. It injures mainly the swelling and opening buds, especially the killing of the swelling buds of the main terminal shoot demands attention.

1) 前に注意したように、最低気温が比較的高いことを意味する。